第２６回（２０１０年度）マツダ財団支援

市民活動概要

公益財団法人　マツダ財団

The Mazda Foundation

設　立　趣　意　書

我が国経済はめざましい成長を遂げ、今日多くの国民が、日常生活の中で豊かさを享受しております。

これには、科学技術の発展のあずかるところが大きく、産業界も厳しい環境を克服し、高度の技術革新をすすめることでその一翼を担ってきました。換言すれば、天然資源に恵まれない我が国は、人びとの英知と勤勉さを資源として科学技術の振興を図ることによって、国際社会に伍し、社会経済の発展を成し遂げてきたといえます。このことは、未来社会においても同様であると考えます。

一方、急速な経済成長は、国の内外における様々な分野で新しい課題を提起してきました。工業化社会、さらには情報化社会の進展による社会環境の変化が、青少年の社会生活に多様な影響を及ぼしていることもその一つであります。物質的な豊かさが精神的な豊かさをもたらさず、むしろ青少年の心の荒廃を加速しているのではないかと指摘されています。心身共に発達形成期にある青少年の育成に、今まさに適切な施策や方途を講ずることが望まれる所以であります。

人びとが共に繁栄を分かち合い、心豊かに生きることのできる社会の実現を願うとき、調和のとれた科学技術の発展と、将来これらを担うべき青少年の健全育成とが相まって達成されていくことが大切と考えます。

マツダ株式会社は、新しい価値を創造し、人びとの喜びをひろげていくことを経営理念として社業に精励しておりますが、このほど実施した社名変更を記念し、併せて創立65周年を来年に控えたこの時期に、経営理念の一端を具現することを願って、科学技術の振興と青少年の健全育成のための助成等を主な事業内容とするマツダ財団を設立し、広く社会の発展に役立てようとするものであります。この財団の趣旨が我が国だけでなく、国際的なひろがりの中で活かされれば、これに過ぎる喜びはないと考える次第であります。

昭和59（1984）年10月

目的及び事業

目的：この法人は、科学技術の振興並びに次代を担う青少年の健全育成のための助成等を行い、もって世界の人びとが共に繁栄を享受し、心豊かに生きることのできる社会づくりに寄与することを目的とする。

事業：この法人は、この目的を達成するため、次の事業を行う。

(1)科学技術の振興に寄与する研究並びに諸事業に対する助成

(2)青少年の健全育成に寄与する研究並びに諸事業に対する助成

(3)科学技術の振興及び青少年の健全育成に関する講演会、シンポジウム・講座、セミナー等の開催

(4)その他この法人の目的を達成するために必要な事業

マツダ財団は

科学技術の振興
青少年の健全育成
分野の社会貢献を行っています。

科学技術の振興

○研究助成

現在並びに将来にわたって解決が求められている、科学技術に関する基礎研究及び応用研究に対する助成。「若手研究者」、「萌芽的研究」、「循環・省資源への寄与」を優先して助成。
対象は、全国の大学及び研究機関。
（累計件数　660件　累計金額　9億1,650万円）

○科学わくわくプロジェクト

青少年の科学離れへの対応として、小中学生や高校生を対象に科学にわくわくする機会を提供し、「科学するこころ」を養うことを目指した事業。
広島大学との連携で、同大学の知的資源を活用した地域貢献プログラムとして実施。

○事業助成

中国地方で開催される小中高の生徒を対象とした「科学体験」に関する研究会等に対する助成。
対象は、中国地方の大学及び研究機関。
（累計件数　245件　累計金額　2,576万円）

青少年の健全育成

○研究助成

次代を担う青少年の健全育成に寄与する研究に対する助成。市民活動との連携強化を図り、市民活動活性化に寄与する実践的な研究に注力。対象は、全国の大学及び研究機関。
（累計件数　154件　累計金額　1億6,048万円）

○市民活動支援

次代を担う青少年の心豊かな成長の一助となる、地域に密着した活動に対する、資金・人材・ノウハウにわたる総合支援。対象は広島県及び山口県の青少年関係の民間諸団体。
（累計件数　478件　累計金額　1億4,860万円）

○感動塾・みちくさ

児童・生徒、指導者、ボランティアの創意工夫を育む「感動塾・みちくさ」を開催。(財)広島市未来都市創造財団との共催。

○大学講義

広島地区の大学を対象に開催。2011年度は、県立広島大学にて「単位互換　ボランティア活動」を実施。

○講演会

本財団の活動主旨を広く皆様に知っていただく活動の一つとして開催。

2006年度	藤原正彦氏	「21世紀を担う子どもたち」
2007年度	柳田邦男氏	「大人が変われば子どもも変わる～いま、絵本の力～」
2008年度	鎌田　實氏	「生きているってすばらしい～幸せの探し方～」
2009年度	茂木健一郎氏	「脳を育てる習慣」
2010年度	養老孟司氏	「生きる力」

（数値は2011年7月1日現在）

名　　称：公益財団法人マツダ財団
設　　立：1984年10月26日
公益法人への移行：2010年11月 1日
所管行政庁：内閣府
事業の概要：世界の人びとが共に繁栄を享受し、心豊かに生きることのできる社会づくりに寄与するため、科学技術の振興及び青少年の健全育成に寄与する研究・諸事業に対する助成、講座・セミナー等の事業を行う
住　　所：広島県安芸郡府中町新地3番1号　マツダ株式会社内　〒730－8670
電話番号：(082)285-4611
ファックス：(082)285-4612
E-mailアドレス：mzaidan@mazda.co.jp
ホームページ：http://mzaidan.mazda.co.jp/

マツダ財団　第２６回市民活動支援一覧 －青少年健全育成 －

活 動 名	団 体 名	ページ
第8回おのみち100㎞徒歩の旅	特定非営利活動法人 おのみち寺子屋	1
「宮園小学校にビオトープを造ろう」	ふるさと宮園ビオトープの会	3
第2回くれ絵本カーニバルの開催	くれ絵本カーニバル実行委員会	5
市民協働による省エネ手作り玩具工作の普及と環境美化	晴海町･青壮会	7
2010呉子ども祭	呉子ども祭実行委員会	9
B&Cタッチステーションを各地に広げよう B&Cタッチサポーター研修	B&Cタッチ･ステーションの会	11
東広島おもちゃ図書館ピノキオ10周年記念行事	ひまわり	13
高校生による環境教育･学習活動	高校生環境ネットワーク広島	15
伴南学区における地域安全対策活動	伴南学区安全対策連絡協議会	17
都市活性化事業「都市ギャラリープロジェクト」	広島市立大学都市ギャラリープロジェクトチーム	19
吉島地域の地元住民である町職人と小学生が連携した 「小学生のための物づくり体験」	よしじま職人工房	21
世界の遊びを体験してみよう！	カモミール～ラマシカ～	23
創作合唱オペラ「いのうもののけ」公演(初演)	創作合唱オペラ「いのうもののけ」 公演実行委員会	25
若者と描く「多文化共生のまち廿日市」の夢	ええじゃん(Asian)	27
スイゲンゼニタナゴを知ろう！守ろう！ ～郷土の生きた宝ものを地域で守る～	スイゲンゼニタナゴを守る市民の会	29
こどもの広場	こどもの広場実行委員会	31
子ども森林ボランティア養成講座「もりメイトキッズ」	もりメイト倶楽部Hiroshima	33
ONE HOME PROJECT(ワン･ホーム･プロジェクト)	Global Bridge	35
学生ボランティア「ほんわかプロジェクト」の定着と 実践活動への支援	ほんわかプロジェクト応援団	37
中高生ボランティア育成	特定非営利活動法人 ワーカーズコープ広島支部	39
エコ学習の実践	大学環境ネットワーク協議会	41
一般公募における､小グループ活動を中心とした 青少年対象野外教育「クラブ事業」	キララ･カウンセラーズ･クラブ	43
山口ひびき少年塾－ぼくらの/ふるさと探検/タウンウォッチングー	山口ひびき少年塾	45
子どもたちと進める里山復活大作戦	Seeds(シーズ)	47
子どもドリームスクール2010	ドリームスクール実行委員会	49
ものづくり科学教室	日本宇宙少年団　周南分団	51
外国人留学生と平川地域における青少年健全国際交流活動	国際交流ひらかわの風の会	53
幼児､小学生読み聞かせ活動推進支援事業	防府市読書グループ連絡協議会	55
香月泰男生誕100年記念　小･中･高校生のための教材制作 ～わたしのシベリア～	特定非営利活動法人 子どもとともに山口県の文化を育てる会	57
「古泉城彦六(こせんじょうひころく)物語」紙芝居プロジェクト	古泉城ニコマル文庫	59
自閉症･発達障害の子どもをサポートするボランティアのための ハンドブック及びDVD作成	自閉症児を育てるママたちの会　ママかん	61
合　計　　31件	800万円	

活動名	団体名	特定非営利活動法人 おのみち寺子屋
第８回おのみち１００㎞徒歩の旅	地域	広島県尾道市
	代表者	理事長　柿本 和彦
	支援金額	50万円

活動概要

【目的】 1. 青少年健全育成（体験学習） 2. 生涯学習（生きがい・やりがいの創造）
3. 市民参加のひとづくり 4. 地域コミュニティの活性化

【内容】 ①リーダー養成：学生ボランティア（大学生・高校生）の事前研修
②ボラ研養成：学生ボランティアの補佐をする中学生の研修
③本番：小学生が尾道市内のコース100㎞を4泊5日を掛けて歩き抜く事業
④フォローアップ研修：学生ボランティアの事後研修

◆実施時期 リーダー養成：5月9日（日）～7月25日（日）：計13日間《向島公民館、他》
ボラ研養成：7月11日（日）～8月28日（土）：計10日間《向島公民館、他》
本番：7月18日（日）、8月6日（金）～10日（火）、8月28日（土）：計7日間
《尾道市内の幹線道路、公共施設（体育館、プール等）》
フォローアップ研修：平成22年8月21日（土）～9月25日（土）：計4日間
《サンボル尾道、他》

◆参加人数 参加小学生：700名、参加小学生保護者：700名
ボランティア研修生（中学生）：110名、学生ボランティア（高校生）：24名、
学生ボランティア（大学生）：1,320名、社会人ボランティア：57名
参加総人員：2,854名

リーダー養成（プレゼンコンテスト）

本番（結団式）

隊列風景（因島大橋）

ゴール（尾道市民センター）

◆実施に伴う効果

【リーダー養成】

学生ボランティアのリーダーとしての能力や資質が育まれ、また、生きがい・やりがいを醸成することができました。そして、積極的に、謙虚に行動することを身につけることができ、学業や市民活動により一層活躍してくれるようになりました。公共心の第一歩となる、すべてのモノへの感謝の念も育んでくれ、個と公のバランスを持って行動してくれるようになりました。

【ボラ研養成】

学生ボランティアと共に子どもたちをサポートすることにより、”人のお役に立つ”
という仕事本来の素晴らしさを体感し、たくましく頼もしく生きていく自立した人間に成長してくれました。

【本番】

参加小学生100名は全員完歩し、忍耐力や協調性、積極性、感謝の念を育んでくれました。また、ゴールでの達成感は大きな自信となり、さまざまな場面で好影響をもたらしてくれています。地元のケーブルテレビをはじめ、多くのメディアが取り上げてくださり、今年はＮＨＫでも番組として制作をしてくださいました。記録映像を小学校の道徳授業で利用したいなどの問い合わせもあり、地域に浸透して来ました。子どもたちをサポートした学生リーダーも多くの障害を乗り越えながら、たくましく成長してくれました。

【フォローアップ研修】

リーダー養成及び本番を通じての学び・気づきを日常生活において習慣化してもらうきっかけを作ることができました。また、過去の自分を振り返り、深く掘り下げることを通じて、現在の自分をより良く知り、将来の夢を具体的に描くことができました。そして、その夢に向って歩んでいくために目標を設定してもらうことができました。

◆苦労した点

・企業協賛の募集活動が、昨今の景気の影響で思うように進みませんでした。
・テレビ局（ＮＨＫ、広島ホームテレビ）の番組制作による打ち合わせや当日の撮影などにより、イレギュラーな事案が多く発生しました。
・学生ボランティアの資質が年々低下しており、リーダー養成での意識づけや本番でのモラールアップに苦慮しました。

◆今後の課題・発展の方向性

・体験不足の学生ボランティアが増え、結果、知恵を出せない学生が増えたため、準備段階での作業が本番で生かされないケースが出てくるようになりました。これまでは作業マニュアルをすべてゼロから作ってもらっていましたが、係りによっては過去のマニュアルを利用してもらうなどの工夫が必要になるかもしれません。
・経済格差の影響か、あるいは貧困層増大の影響か、公務員や大手企業の家庭の子どもたちがエントリーの大半を占めるといった現象が見られるようになってきました。できるだけ幅広い子どもたちにエントリーのチャンスを与えることができるよう、登録料を抑え、企業協賛を募り、ボランティアによる運営を行っていますが、何らかの方策を検討しなければならないかもしれません。
・ストレス耐性が育まれていない学生が増えてきたため、リーダー養成期間中のフォローがこれまで以上に大切になってきました。

◆活動を終えての感想・意見等

第８回おの１００も多くの方々のお力をいただき、無事に全員完歩することができました。

参加小学生の資質や能力は８回を数えた今回も開催当初とそれほど変わりませんが、学生ボランティアの資質は明らかに低下しています。まさに、幼少期の体験不足が生きる力の欠如となって今の大学生に現れてきているように感じます。意欲の低下、自己肯定感の無さなども社会が求める人材と大きく乖離してきています。

大学生の成長をサポートできるプログラムになるよう、リーダー養成のカリキュラムを変更していくことが急務のように思いました。

幸いにも、小学生や保護者の皆様からは多大なるニーズを得ていますので、青少年健全育成の”青年”に重きを置いたアプローチを今後は考えて参りたいと思います。

活 動 名	団 体 名	ふるさと宮園ビオトープの会
宮園小学校にビオトープを造ろう	地　　域	広島県廿日市市
	代 表 者	会長　小林 秀樹
	支援金額	15万円

活動概要

ビオトープ造りをはじめて本年4月で7年が経過しました。この間、必要に迫られて購入した工具・刃物類が多数あり、学校内での活動ですので安全確保のための保管場所に苦労致して居りました。今般、貴財団の御支援を頂き立派な倉庫を設置することが叶い用具類の収納に万全を期することが出来るようになり活動に携わるビオトープの会員はもとより教師も大いに安心いたしております。ありがとうございました。

なお、倉庫については子どもたちは勿論、会員たちもビオトープには大きな夢を持っておりこれらの夢を託す意味を込め、ビオトープの愛称である”くるりん村”にちなみ「くるりん村の夢の蔵」と命名され活用しています。

◆実施時期

廿日市市宮園１丁目１－２　　宮園小学校グランドの一角約1000㎡

◆参加人数

ビオトープの会では年間を通じ毎週土曜日午前中を活動日と定めており、
7～10名が毎週作業に当たっており、昨年度を例にとると、
年間作業日数57日延べ人員481名が参加しました。
平成22年度も同程度になる見込みです。

平成２２年４月マツダ財団の支援による倉庫
「夢の蔵」と命名

宮園小学校ビオトープ（くるりん村）の全景

山からの自然水がせせらぎ川を形づくり
ビオトープを潤している

３年生によるビオトープの畑で観察し育てた
大根の収穫に歓声と感謝

◆実施に伴う効果

ビオトープの会では公民館の協力を頂き、年間2回のビオトープ観察会と、近くを流れる川での「川探検」など親子・地域住民を対象にした自然観察の機会を設けていますが、住民、特に保護者の間ではビオトープや自然環境に対する関心が深まってきていると感じています。

また、聞くところによると宮園小学校ビオトープの活動が刺激となり、隣接する小学校でも放置されていたビオトープを復活させる話が出てきたとのことです。

◆苦労した点

ビオトープ作りに関する苦労は、楽しみの方が上回り特に感じていませんが、昨年までは学内での器具による事故防止が問題でした。今回の倉庫の設置により工作道具などを子どもの目から遮断隔離することが可能となり、心配がなくなり助かっています。

予算は、コミュニテイ協議会から年間15万円程度の支援が有り、また、夏祭りなどの機会に夜店を出店し売り上げを活動経費にあてるなどの工夫によりなんとか運営出来ています。

PRは「にこにこ活動便り」「ビオトープ通信」を随時発行し、住民とのコミュニケーションをはかっています。

外部に対するPRについては、最近では中国新聞6月14日朝刊9面で大きく紹介された事例が有ります。そのほか、リビング広島などでも時折紹介されています。

◆今後の課題・発展の方向性

昨年度で一応の造作は完了したものと考え、今後は地域の植生や生き物の定着・育成が主テーマとなっています。現在、広島県環境保健協会職員を講師に依頼して観察会や生き物調査を実施していますが、今後講師として継続して頂けるか否かが問題に成って来ると考えています。その面での展望は開けていないのが現状です。

また、現在活動している男性は高齢者が中心であり将来を思うと早期に後継者を取り込む必要が有ると考えています。

◆活動を終えての感想・意見等

個人的な思いとしては、自身子どものころ山中に秘密基地と称して小屋を作り、がき大将的に遊んだことを思い出し今どきの子どもたちにも目一杯自然の中で遊ばせてやりたいとの思いに駆られています。

活 動 名	団 体 名	くれ絵本カーニバル実行委員会
第2回くれ絵本カーニバルの開催	地　　域	広島県呉市
	代 表 者	委員長　長町 三生
	支援金額	15万円

活動概要

昨年に続いて本年も「ふしぎくれ絵本カーニバル」を開催した。この催しの目的は、数百冊の絵本を一堂に集め，親子が絵本を見，絵本を読むことで、①親子の対話を促進し，②絵本を読むことを楽しみ、③想像性を育み、④創造性を育成すること，である。実態調査によると，絵本カーニバルに来た子供たちのかなりの人達が家に帰っても本の読み聞かせを親に求めたり，自ら本を読む習慣をもつように変化する。

今回はボランティア全員の意向で、「ふしぎ世界の旅」というコンセプトを決定し，国際感覚(Globalization)を育むことを考え、世界を5つの大陸に分類し，それぞれの大陸に該当する”不思議”の絵本を450冊選定しそれらをサブコンセプトに合うように並べて分かりやすくした。

イベントとしては，絵本を並べると共に，7団体の「絵本読み聞かせグループ」の担当で，それぞれの大陸の”ふしぎ”を選んだ本から7回の読み聞かせを実施した。それ以外に，紙芝居，折り紙づくり，紙飛行機大会等子供たちを飽きさせない工夫を凝らして，楽しい絵本カーニバルを実施した。紙飛行機大会は絵本を読む文化的な催しの中で理科科学的発想を育成することを狙いとして，折り紙の折り方で遠くへ飛んだり空中を長く飛行する理屈を理解させ，自分で折って作成した飛行機がどのように狙い通りに飛んだかを体験・理解させ、3等までを表彰することで大変な盛り上がりがあった。大人たちも別グループとして参加し、たいそう喜んでくれた。

◆実施時期　平成22年9月25日（土）・9月26日（日）の2日間　呉市総合体育館オークアリーナ（武道場）

◆参加人数　9月25日（土）（11：30～17：00）－294名

9月26日（日）（10：00～16：00）－303名（2009年度は合計で581名）

参加総人員　597名

子供たちとのテープカット

親子が一緒

読み聞かせ

遠くへ飛んでゆけ～

◆実施に伴う効果

＜効果＞

①昨年度と比較して、格段に親子連れの参加者が増加したこと（写真参照）。本カーニバルの狙いは親子の対話と親子の交流、そしてその作用として本読みの習慣が生まれ、増大すること、です。その狙い通り、親子の参加者増大は本委員会として最大の喜びです。

②読み聞かせを7回実施しましたが、参観者から「とても良かったし回数も多くてたくさん楽しませてもらった」、との声を沢山頂きました。

③紙飛行機大会が最大の盛況でした。親子共に約30人（計約60人）の参加者が折り紙の仕方を学び、飛ばせて飛行距離を競うイベントでしたが、会場が大騒ぎでした。こども入賞者には感想を大きな声で発表してもらうなど会場全体の交流が実現でき、参加者からも「飛行機大会が最高でした。家でも家族でやってみます」との意見が多く寄せられました。（写真参照）

④何人かの父親から，「子供とこんなにたくさんの絵本を一度にたくさん読んだのは初めてです。1年ぶんくらい読んだと思います。これからが大変です。毎日「よんで」と言われそうです」と半ば喜んでお帰りになりました。

⑤10月13日（水）の反省全体会議では，ボランティアとして主体的に活動した8つの読み聞かせグループ及び保育グループの意見では，多くの参加者から喜ばれ感謝され，実施してよかった、との意見がだされた。

＜総括＞

地域ごとに小さな子供向き図書館が併設されているが、そこで親子が声を出して絵本読みをすることは，周囲への影響もあって，ほとんど見かけない。これに反して，絵本カーニバルは声を出して読んでも誰にははばかることがないので，親も子供も自由な気持ちで本を読んでいた。時にはすでに読んだ本から関連する本を子どもが選び出して来て読んでいた。このような現象は450冊も一同に存在する環境だからこそ発生する現象です。

昨年もお越しになった親から，「此処に来たことが本を読む契機になりました」と言われましたが，本を読む習慣，あるいは本読みが楽しくなる契機を絵本カーニバルが作り出す力を持っていると考えられます。

たくさんの絵本に囲まれ，その中から興味のある本を探し，自分が読んだり，親に読んでもらうことから，想像性を膨らましいろいろな事柄を考える能力が育ちます。またその中から常識を養い良き人間関係を維持する気持ちも生まれます。九州大学で私どもが考えた「子ども育成」のアイデアは間違っていなかったと考えます。

（注：絵本カーニバルは長町もふくめて数人の教授たちのアイデアで生まれた形式の「移動する図書館」の1種です。これは2007年には経済産業省のGood Design賞をいただきました。くれ絵本カーニバルはこれを基盤として，呉方式でアレンジした形式のものです。）

◆苦労した点

①たくさんの親子連れに参加していただくことが，最大の課題です。そのために広島国際大学女子大生にかわいいポスタを作成してもらい，300枚印刷をしました。また幼稚園・保育所・小学校・中学校の参加を呼びかけるためにチラシを3，000枚印刷しました。これらを呉市教育委員会のネットワークに乗せて各学校に配布をしました。

②それ以外に，新聞社記者会見（中国新聞だけ記事を掲載してくれました）の実施，呉市市民だより及び呉市市内誌KUREBANに記事のお願いを依頼しました。その他，各地図書館，スーパーマーケット等人が集まりやすい箇所の張り紙をお願いしました。

③このような形でPRの展開ができたのは、呉市教育委員会が全面的な協力をしてくれたこと，呉市内の8グループの読み聞かせの人たち及び保育グループの先生方の協力があって実現したものです。もちろん，呉市中央図書館の協力によって450冊の絵本の抽出作業が可能となりました。その他，呉工業高等専門学校の学生たちが図書館から32台の平台と図書を運搬してくれるなどの協力もありました。

④最大の課題は、経験的に算出して約20万円あれば僅かな余剰金を加えて予算的は大丈夫と考え，マツダ財団に助成をお願いしたところ、助成金は15万円でしたので，いかにして予算の範囲内で実行するかが大きな苦労でした。デザイン料・アルバイト料・看板料などすべて作戦より低額でお願いし，読み聞かせグループにも飾り付け材料を負担していただくなど切り詰めましたが，結果的に赤字になりました。

◆活動を終えての感想・意見等

①最大の課題は「資金の調達」にあります。もともと呉市の活性化活動として出発しましたが，資金に関しては呉市に頼らなくて外部からの支援で実行するというスローガンで進行しているものです。外部のみなさんにはご迷惑をおかけしておりますが，なんとしても自前主義を貫きたいと考えております。

②したがって，今後も10年は続けたいと考えておりますので，定例的に20万円程度の出資が可能な計画を立たなければなりません。この点は，委員長ひとりで調達しておりますが，大勢の方々に協力をお願いしなければならないと考えております。

活動名	団体名	晴海町･青壮会
市民協働による省エネ手作り玩具工作の普及と環境美化	地域	広島県呉市
	代表者	会長　山本 正
	支援金額	23万円

活動概要

青壮会設立後6年目の活動として､手作り玩具の工作教室を中心に｢作って遊ぼう｣､｢親子で作って親子で遊ぼう｣をキャッチフレーズに､市民協働を活用しながら精力的に展開しました｡具体的には新型糸引きコマの開発や､旧作品のブラッシュアップに取り組みながら工作教室15回実施､工作玩具の遊び体験コーナーを19会場で延べ1500日開催など活動範囲を拡大して玩具工作普及に努力しました。

工作教室活動の新しい展開として校区外の放課後教室から要請を受けて実施した40人規模の教室(プラトンボ工作)が大好評で次年度以降も継続が決定しています。

また貸し出し工作玩具を教材とした遊び体験授業等が好評で現在も小学校や公民館､児童館など10会場で子供達が遊んでいます｡ものつくり大好きな子供達を育成するために地域のボランティアスタッフを中心に市民協働を活かしたネットワークづくりにも着手しました｡青壮会の玩具工作普及活動はその継続と充実が期待されています。

◆実施時期

2010年4月1日～2011年3月31日

･青壮会海岸作業所を中心とした町内及び港町小学校､他

･呉市民協働センター､市内公民館及び呉市主催のイベント会場他

◆参加人数

学校工作教室関連:800　･こども祭り:600　･エコフェスタ:300

･その他のイベント会場他:900　･小学校､公民館等の玩具遊び体験:3,800

参加総人員:6,400名

小学生の工作教室参加人数(内数):450名

呉第三地区とんど祭り(ぷらとんぼ工作)

呉第三地区とんど祭り(コマ遊び)

昭和北小 放課後教室のぷらとんぼ工作

◆苦労した点

①玩具工作の拡大に苦労しました。
工作教室数やその受講者増は、材料、部品の調達からキット工作の下拵え加工、一時保管、治工具類の整備など、準備作業の増加の他、加工作業場所や保管場所にも苦労しました。
②小学校等での工作玩具遊び体験が人気となり貸出玩具が300点を超えたことから、その製作や運搬、展示、遊び方の指導、定期的な見回り点検、修理、次会場への移動などに、多くの時間と労力を必要としました。またその費用負担も大きく捻出に苦労しました。
③工作部品、材料の調達先の一つである100円ショップの品切れやモデルチェンジ、値上がり多発に開発モデルの設計変更など再々発生した。
④年度の後半は次年度の活動資金確保のための地域テーマ募金活動にも取り組みましたが、青壮会工作活動のPRに当初計画にない工作教室や作品展示遊びコーナーを実施するのに苦労しました。
なお、募金活動が終了した現在も工作玩具の遊び体験コーナーは好評で10会場で継続中です。

◆今後の課題・発展の方向性

① 工作教室数の増加と充実
・今年度からはじめた工作教室、呉アドベンチャースクール(3回実施)、昭和北小(1回実施、2回目5/18予定)はいずれもシニアボランティアの担当スタッフがおり子供たちへの指導体制が一応整った教室への参加であり今後の教室数拡大路線の事例となりうる効果的な工作教室が出来た。
・玩具工作普及の加速には工作を必要としている対象グループを見つけ出して参加し、教室を継続することがポイントと考えます。したがって今後、あらためて市の教育委員会、ものづくり教育に熱心な公民館、学校などとの連携が必要です。次年度の活動に活かします。
② 工作玩具の貸出しによる遊び体験コーナーの展開
・工作玩具の遊びコーナーは各会場とも好評ですが製作、点検保守、修理等に時間と費用の制約から一度説明会を開いて修理や自作をすすめるなどスタッフの労力軽減策も考慮しながら展開要。
③ 新型糸引きコマの開発
・コマのタイムレースやコマ相撲(けんか)にはスケールアップが必要であり胴径:40㎜の3分間まわるプラスチックコマの試作に成功しました。今後の工作教室の主力作品にすべく年間500個程度製作可能な治具の自作を含めた工作教室用の加工、組み立て方法の確立が課題です。

◆活動を終えての感想・意見等

・活動範囲拡大で仲間のボランティア意識高揚
新展開の放課後工作教室など市民協働による新たな工作教室では、その地元のボランティア仲間との協働作業が勉強になりました。市民協働で子供たちの指導に当たることで、お互が良いパートナーとして認めあい双方スタッフのボランティア意識の高揚につながりました。
・全国ボランティアフェスティバル(9/25、26)で青壮会に活動報告の機会が与えられ、貴重な体験をさせて頂くと共に、県共同募金会のH22年度地域テーマ募金の支援につながり感謝しています。
・H22年度の後半は、工作関連の活動と次年度活動資金確保のための地域テーマ募金とが同時進行となり大変多忙でした、特に東日本大震災の影響もあり募金が集まらず苦労しました。
・私たちは今回の募金活動体験を通してマツダとその関連企業の社会貢献(青少年健全育成等への支援)に対する取り組みにあらためて感服しました。この3年間のご支援本当にありがとうございました。

活 動 名	団 体 名	呉子ども祭実行委員会
2010呉子ども祭	地　　域	広島県呉市
	代 表 者	実行委員長　藤田 繁逸
	支援金額	20万円

活動概要

呉の子どもたちが,呉の文化や人々の温もりに触れ,呉の楽しさを知ることのできるふれあいの場を提供することを目的に,テーマを「わんぱく☆わんぱーく」と設定し,野外ステージでの子どもたちの発表やミニSL試乗会,手作り玩具の工作・遊びコーナーなど,親子や友達の絆を深めることができる参加型の世代間交流イベントを実施した。この祭の特徴として,市内の子ども会役員等関係団体以外に,高校生ボランティアが前年の10月から企画会議を毎月行い,当日の企画運営に参画していることが挙げられ,高校生の社会性,自立性,創造性を培い地域とのコミュニティを深める場となっている。

◆実施時期
2010年5月4日(祝) 9時30分～16時
呉ポートピアパーク(呉市天応大浜3丁目2番3号)

◆参加人数
32,000人(内運営者延べ500人)

参加総人員 32,000名

子どもたちに大人気のミニSL試乗会

何匹つれたかな？魚釣りコーナー

みんなに届け！ 巨大こいのぼりにメッセージ

歌のおにいさんの楽しいステージ

◆実施に伴う効果

各地区子ども会活動の活性化を促進するとともに,各団体のネットワークの形成,交流につながった。また,高校生のボランティア活動など,高校生が主体的に行動することができるきっかけにもなり,「人のために役立つ」喜びを実感できる場として青少年の健全育成にも大きく貢献している。

◆苦労した点

参加型・交流型のコーナーについて,高校生部会では前年度の反省を生かしながら新しい企画を検討しているが,テーマの決定に時間がかかるなど,1か月に1度の部会活動では,準備期間が限られ思うようにはかどらなかった。また,補助金や支援金の削減により,予算配分も年々難しくなってきている。なお,運営に関わる高校生は進級・卒業のため,年に1度の機会を逃すことができないため,雨天時の対応策については最善策がないが,警報等が発令されない限りは事業開始の方向で考えている。

◆今後の課題・発展の方向性

高校生ボランティアの参画による一定の成果(ネットワークづくりや連携体制,自主性・自立性等)は認められるが,彼らと地区子ども会及び参加団体のコミュニケーションづくりについて,コーナーでのお手伝い等の実績はあるものの,もっと深める必要があると考えている。また,回を重ねる毎に参加者も増えており,補助金等の削減及び事業規模拡大に伴う予算確保が厳しくなり,あわせて来場者向けの駐車場確保が問題となっている。

◆活動を終えての感想・意見等

ゴールデンウィークという大型連休中は,各地で多くの行事が開催されるが,呉子ども祭には多くの方に来場・参加していただき感謝している。KSF部会を組織している高校生ボランティア達が,自主的主体的に企画運営へ参画し,自分たちの活動の場として意識し,呉子ども祭に参加する子どもたちが心から楽しく過ごせるよう祭りを盛り上げてくれ,さらに彼ら自身の成長にもつながっていることを,喜んでいる。参加した高校生ボランティアは;卒業してからも参加者として,あるいは出場者として顔を出してくれており,彼らの活動は単なる一イベントへの参加ではなく,次へつながる,あるいは成長し続ける場として大切な役割を担っている。

活動名	団体名	Ｂ＆Ｃタッチ･ステーションの会
B&Cタッチステーションを各地に広げよう B&Cタッチサポーター研修	地域	広島県呉市
	代表者	会長　礒井 裕子
	支援金額	30万円

活動概要

1)【子育て教育セミナー】ベビーケアとチャイルドケアに対応できる支援に拡大すべく、教育セミナーを2回に分けて開催し【子どもの成長に合わせた関わり方】を学び、会員の支援レベルをワンランクアップした。
2)【テキストの標準化】子どもの成長に合わせた関わり方をテキストに編集し、制作し、各ステーションで活用した。他地域展開は、NPO日本タッチ･コミュニケーション協会と共催でセミナー、講演会などを行った
3)【リーダー研修】既存のステーションの支援レベルをチャイルドまでアップするため、また、新規ステーションの増設の為にリーダー研修を開催した。
①呉市、廿日市市、広島市安佐北区(亀山)、安佐南区(佐東)、中区の5つのステーションにチャイルドケアができるサポーターが増え、支援レベルがアップできた。
②ステーションの開設準備中であった広島市南区、安芸地区(坂、海田、熊野)、福山市(沼隈町、駅家町)、神石郡(神石高原町)で、7つの新規ステーションが設立し、Ｂ＆Ｃの賑わった活動をしている。
③開設の予定ではなかった2地域で新規ステーションが設立。広島市安佐北区真亀は、真亀公民館から要請･安佐南区西風新都は、広島信用金庫西風新都店からの要請で設立し、現在稼働中。
④他地域展開として熊本･倉敷･児島で設立準備を始めた。
4)【タッチステーションのネットワークの構築】各地域のステーションとの連携を深め、幅広い支援ができるよう、ネットワークを構築した。

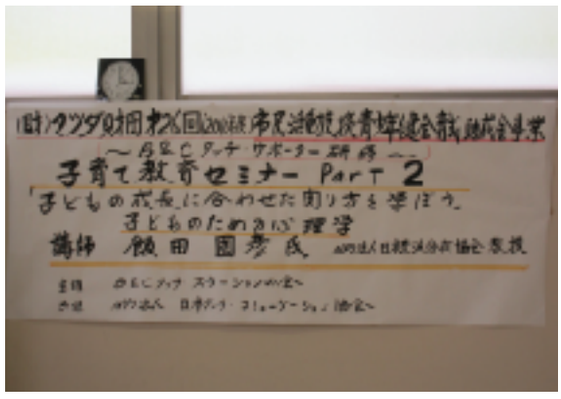
◆実施時期 1)【子育て教育セミナー】
パート1【日時･場所】2010年4月17日　10:30～16:00　会場:呉ポートピアパーク
パート2【日時･場所】2010年6月4日　13:30～15:30　会場:呉ポートピアパーク
2)【テキストの標準化】 4/1･5/6･6/3･7/1･9/2･10/7　10:00～13:00二葉公民館･呉ポートピアパークなど
10月～11月データ入力･編集･出版
12月12日･ソロプチミスト児島と倉敷市立短期大学との共催で教育講演会が開催され、本事業のテキスト内容で講義し、ソロプチミスト会員、学生など85人が参加。ソロプチミスト児島クラブルビー賞を受賞した。
3)【リーダー研修】 4/22･5/27･6/24･7/22･9/30･10/28　10:00～13:00二葉公民館など
4)【タッチステーションのネットワーク構築】2010年11月25日　13:30～15:30　二葉公民館

◆参加人数 1)【子育て教育セミナー】 パート１:2010年4月17日、延べ人数65名、パート2:2010年6月4日、延べ人数24名
2)【テキストの標準化】 全6回、延べ人数57名
3)【リーダー研修】 全6回、延べ人数61名

参加総人員　207名

会議風景

支援者セミナー風景



支援者セミナー風景

支援者セミナー風景

◆実施に伴う効果

・サポーター研修として「子育て教育セミナー」を2回にわたり開催したが、サポーターだけでなく、一般の子育て中の方の参加が多くあった。自分の子育てに生かして実践できるため、次期のサポーター養成にも期待　できる。
・「子育て教育セミナー」開催後、交流分析や心理学に興味を持つサポーターやお母さん達が多くみられ、各地区の心理学講座を受講希望の人が増えた。また、NPO法人日本交流分析協会の安芸教室が開催する「交流分析士2級」講座を受講し、スキルアップを目指すサポーターが増えた。
・保育士や子育て支援センターの職員など、すぐに実践できるサポーターが参加し、リーダー不在だった熊野町でのステーション開設に繋がった。
・ひろしん(企業)や真亀公民館(公共)からの講座依頼があり、準備予定ではない地域でも、ステーションを立ち上げる事ができた。毎月1回のペースで地域の親子が集まり、サポーターの実践の場として活動している。

◆新設ステーション
安芸地区・海田東児童館　・なぎさ若竹なかよしハウス
熊野地区・熊野子育て支援センター　安佐地区・ひろしん西風新都店　セミナールーム　・真亀公民館
福山地区・神石郡神石高原町　小畠保育所　・沼隈町　常石保育園「すくすくハウス」　・駅家町　宜山ひかり保育園

◆現在準備中
熊本・・・来年度にセミナーを実施する予定
倉敷・・・セミナーを開催後、来年度、ステーション立ち上げ予定
児島・・・ソロプチミスト児島より要請があり、教育講演会を開催した。来年度、ステーション立ち上げ予定

◆苦労した点

・広島県内でステーションを立ち上げるのは、NPO日本タッチ・コミュニケーションのセミナーと連携して展開できるが、他地域の場合は交通費の捻出が難しく、継続的な活動が展開しにくかった。受け入れ先が団体(ソロプチミスト児島、倉敷光クリニック)の場合はそこから保育園などと繋がれる機会があり展開しやすいが、受け入れ先が個人の場合は地域の理解を得るまでに時間を要し、思うように捗らない。
・当初は、チャイルドケアの部分だけのテキストを作成する予定だったが、原点のベビーケアがなくては、チャイルドケアだけでは理解が難しいということが分かり、テキスト編集が予想以上に時間がかかった。(ベビーの内容は、これまでNPO日本タッチ・コミュニケーション協会の作成した資料などを活用させて頂き、ベビーからチャイルドまでのテキスト化が行えた。)
・呼びかけをするまで支援者のフォローアップの目的で企画していたが、これまでNPO日本タッチ・コミュニケーション協会のセミナーを受講された子育て中の親へも、声かけを行ったところ、未収園児を抱えた参加者があり、急遽託児サービスをつけなくてはならなくなった。(NPO日本タッチ・コミュニケーション協会の協力を全面的に受けて、迅速に対応できた。)

◆今後の課題・発展の方向性

NPO日本タッチ・コミュニケーション協会の主催するベビー＆チィイルドセンターを中心として、各地域のステーションがネットワークを組み、B&Cタッチステーションの会が設立し、本事業によって、広島県内にそのネットワークが広がり、サポート体制も拡大し、内容も充実できた。

＜今後の課題＞
交通費や人件費が捻出できない現状では、どのように県外への普及していくのか、ということが課題である。

＜発展の方向性＞
新規ステーションの継続と、活性化。作成したテキストを使って、新たなサポーター養成や、新規ステーションの準備を行っていきたい。
現在、NPO日本タッチ・コミュニケーションは、ソーシャルビジネスプランナー養成講座に力を入れており、本会もそれに同調して発展していきたいと考えている。

◆活動を終えての感想・意見等

本事業の成果として、広島県内に5つあったステーション(呉市・広島市中区・安佐北・安佐南・廿日市)に加え、新規ステーション(安佐北・安佐南・安芸区・熊野町・福山)が立ち上がり、他地域(熊本・児島)にも開設準備が始まりました。各地域のステーションでは、子どもの心に沿った子育てがしたいと心理学や交流分析に興味を持つ親が増え、積極的に各ステーションへの参加、利用をされる親子が増え、私たちの活動も活気づいてきました。
子育て中のお母さんや現職の保育士・支援センターの職員など子育てに関わっている方とのバリアフリーの活動の輪が広がり、次期サポーター候補者も自主的に手が上がるようになりました。これもひとえに、マツダ財団様より温かいご支援をいただいた賜物と、Ｂ＆Ｃタッチ・ステーションの会の代表として、心より感謝申し上げます。これからもご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

活動名	団体名	ひまわり
東広島おもちゃ図書館ピノキオ10周年記念行事	地域	広島県東広島市
	代表者	代表　増井 里恵
	支援金額	20万円

活動概要

設立から10周年を迎えた東広島おもちゃ図書館ピノキオの10年間のあゆみを振り返り、これからの10年間の活動に向けて新たなボランティアを育成し、活動を強化していくこと。また、おもちゃ図書館を広く周知し、障害児の「遊び場」を告知していくことを目的とした活動です。

◆実施時期
2010年4月1日～2011年3月31日

◆参加人数
6月19日ピノキオランド 17人
9月25～26日全国ボランティアフェスティバルひろしま 12人
1月22日ピノキオランド 7人
2月12日児童図書プレゼント会 23人
3月5日クレープ作り 7人

参加総人員:66名

6月ピノキオランド

6月ピノキオランド

1月ピノキオランド

クレープ作り

◆実施に伴う効果

おもちゃ図書館が地域の方に知られる「きっかけ」になったと考えています。
障害児が安心してのびのびと育まれるための活動をしている「おもちゃ図書館」の活動を地域に人に知ってもらい、障害児への理解を求める活動になったと考えています。
また、障害児にとっても、健常児と一緒に遊べる場所として活用していただけるように、いろいろと考えていただいたようです。

◆苦労した点

参加費を、健常児に関して一人100円求めたことで、参加者が少なくなる傾向があります。
参加費の徴収は、「儲ける」ためではなく、健常児の参加をある程度抑制し、障害児が安心して遊べるようにしたい、との考え方からですが、公営で健常児が無料で遊べる場所があることで、健常児の遊び場としての選択肢から外されてしまったようです。
しかし、障害児の保護者からは、元気な健常児たちに萎縮したり遠慮することなく、のびのびと遊べた、との感想も寄せられました。
障害児と健常児の「ふれあい」も必要ですし、健常児にとっても、障害を持つ人のことを知るのは大切なことですが、元気な子どもたちと障害を持つ子どもたちのバランスをどのように考えていくか、永遠のテーマのように苦労(？)しています。

◆今後の課題・発展の方向性

障害児が安心して遊べるために、そして、健常児がおもちゃで遊べる機会を増やすために、健常児が無償で遊べる日(完全開放日)も織り交ぜながら開催していくこと、そして、健常児の保護者にも障害児を理解する機会を作ること、たくさんの人をボランティアに「巻き込んでいく」ことを課題とし、ボランティアを育成する研修メニューの充実を図りたいと考えています。

◆活動を終えての感想・意見等

ピノキオを開館して10年。記念すべきときに何か楽しいことをしたい。それから、次の10年に向けて新しいボランティアも増やしたい。そんな思いから1年間の活動を続けました。
とにかく楽しいことをしよう、と思い続けましたが、大人が「楽しい」と思うことと子どもが「楽しい」ことが違い、子どもたちに「振り回される？」とっても楽しい活動でした。
障害を持つことと持たないことが「紙一重」のできごとだと伝えていけたら、と思います。

活動名	団体名	高校生環境ネットワーク広島
高校生による環境教育･学習活動	地域	広島県広島市
	代表者	代表　竹本 伸
	支援金額	15万円

活動概要

本会は環境問題に関心を持つ高校生（主に広島市内）が学校をこえて連携し、地域の環境を学ぶことを目的に3年前にスタートしたネットワーク組織である。2010年度はこれまで学習してきたことを生かし、子どもが遊びながら地域の環境を学べるような「エコカルタ」の作成に取り組んだ。読み札の言葉は広島市及び近郊の高校生から募集したところ、5校の188名から400個以上の応募があった。

カルタを作成する上では、単なるゲームに終わらず環境の学習に役立つよう、次の点に配慮した。

･小学校中学年以上の子どもが遊ぶことを念頭に置きわかりやすい言葉に配慮した。
･絵札の文字はどこに文字があるのか分からないようになっていて、中には絵の中に隠れている場合もある。
･とった札が正しいかどうかは裏に読み札の文字が書かれているので確認できる。
･読み札の裏にはその言葉のキーワードと一口解説が付いている。

これらの特徴から、読み札の言葉を聞いてその内容を理解するとともに絵もしっかり見なければならないこと、読み手がゲームを進めながら一言簡単な説明を加えることで、参加者が知らず知らずのうちに環境問題への理解が進めることが出来るようなカルタとなった。

エコカルタは約300個作成し、市内の児童館及び留守家庭子ども会に配布した。

◆実施時期

2010年9月～2011年3月　広島市内の公民館を利用

◆参加人数

高校生	22名	
各校指導者	3名	
広島市地球温暖化対策地域協議会教育･学習ワーキンググループ	5名	参加総人員：30名

エコカルタ　絵札

エコカルタ　読み札

カルタ風景

集合写真

◆実施に伴う効果

高校生が自主的に環境問題に取り組む活動は、県内ではあまり例がなく、学校を超えて連携する事例は皆無と言っていいが、環境問題に関心を持っている生徒は少なくない。友人どおしではなかなか会話になりにくいこの環境問題について、関心のある生徒が集まって自由に議論したり、学校を超えた仲間が一つの目標に向かって取り組むことは、教育的に見ても大きな意義があったと考えている。また、テレビ(※1)で取り上げられることにより啓発面で意義があったばかりでなく、カルタを配布した広島市内の児童館や留守家庭子ども会では、楽しみながら自然に環境問題について学ぶことが出来ると大変好評であった。 高校においても授業の中で利用された報告を受けたが、環境問題の章を終えた後にカルタを行ったところ生徒にも大変好評で環境問題に対する認識がより深まった、教育的効果の面でも大変意味のあるものだとの評価をいただいている。

※1 広島テレビ 2011年4月20日(水)「テレビ派」の「エコッ派」コーナー

◆苦労した点

学校内での活動であれば、クラブや生徒会といった組織を利用してメンバーを集めやすく放課後を利用して活動できるが、学校をこえた活動になると、メンバー募集一つとってみても集めること自体もなかなか困難であり、活動する人数の想定がつかず、毎年スタートするまで大変気をもんでいる。今後は中核となるいくつかの学校が組織的に関わってもらえれば、もう少し安定した活動が可能になるのではないかと考えている。

また、活動の性格上、予算が全くないため関係者の手弁当で行っている。 したがって、今回のような助成をいただいたことで、こうした形に残るような活動が出来た。当初は小学校の各校に1個ずつ配布する予定であったが、学校に配布するとなると様々な制約・条件があり、簡単に全校配布にならない状況があった。また、小学校に配布してどのくらい教育的効果があるのか(実際に使ってもらえるかどうか)についても、不透明な部分が少なからずあったため、結果としてより多くの教育的効果の期待できる児童館等に配布することとなった。

◆今後の課題・発展の方向性

参加メンバーをどのようにして集めていくかは今後も大きな課題であるが、高校生が学校をこえて環境問題を自主的に学ぶ活動は、教育的に見ても大きな意義があるものと思われるので、課題を整理しながら可能な限り活動を続けていきたいと考えている。

◆活動を終えての感想・意見等

2010年度の活動について、当初は講義や見学を主体とした活動を考えていたが、貴財団から助成をいただいたことで、高校生の気持ちの中で学習活動を形に残したいという思いが強くなり、話し合いを進めていった結果、エコカルタの作成というユニークな活動になった。前記のような学校外での活動ならではの困難さもあったが、完成した時の高校生の充実感あふれる笑顔を見ていると、活動をこのような形にできて大変良かったと思っている。

活 動 名	団 体 名	伴南学区安全対策連絡協議会
伴南学区における地域安全対策活動	地　　域	広島県広島市
	代 表 者	会長　守安 宏史
	支援金額	30万円

活動概要

人の人との交流を原点とし、青少年健全育成の観点から、日常生活における実践・体験重視型の行事を通じて、児童自らが様々な安全対策に必要な知識を身につけることを目的とした活動を実施した。また、外国人との交流を取り入れ、児童たちがお互いの国について相互理解を深め、世界に目を向けるきっかけ作りとなる活動を実施した。

◆実施時期

周年

伴南学区内等

◆参加人数

参加総人員 1,780名

水難防止講習

野外活動・田舎体験活動

国際理解学習　シュラブ先生

国際理解学習　JICA

◆実施に伴う効果

子ども110番スタンプラリーはケーブルテレビで放送され、他学区から実施要領等の問い合わせがあった。

水難事故防止講習はNHK及びケーブルテレビて放送され、プロフェッショナルを呼ぶにはどうしたら良いのか問い合わせがあった。結果、他の2校でも同様の講習を実施できた。

広島県防犯フォーラム広島海上での事例発表を伴南学区に対し依頼があり、発表内容について他地域からの問い合わせ、情報交換ができた。

新しい団地につき、転入者等が安全対策活動を通じ住民同士の親睦の場としての役割も果たせた。

◆苦労した点

学区(団地)の急速な発展に伴う人口、児童数増加の状況において、活動の規模を大きくしなければならなかったこと。

安全対策活動は、これだけすれば完璧というものがない終わりのない活動であることから、如何にして持続性を持たせるかという点が難しい。

会報「エンゼルランプ通信」を通じて伴南学区の活動を継続して情報発信していきたい。

活動を継続することで、防犯講習会等で事例発表ができる団体としての役割を果たしたい。

◆今後の課題・発展の方向性

日頃の生活の中で自然と活動ができる行事等を工夫しながら実践していきたい。

自分たちの街を安全で安心して生活できるよう、地域の総意として活動ができる体制を築きたい。

将来を担う学区の子どもたちの心に、自分が育った故郷・伴南学区を誇りに思えるような活動を展開していく。

息の長い活動を心がけること。

◆活動を終えての感想・意見等

財団の支援金により、活動に幅ができ住民、児童相互間の交流ができた。今後は、支援金がなくても学区独自で実のある活動ができるように努力したい。地域活動を活性化させるための活動にはどうしても予算が必要であり、財団支援金により、飛躍の一年となったことに感謝しています。

活動名	団体名	広島市立大学都市ギャラリープロジェクトチーム
都市活性化事業「都市ギャラリープロジェクト」	地域	広島県広島市
	代表者	広島市立大学 国際学部 准教授 金 泰旭
	支援金額	25万円

活動概要

都市ギャラリープロジェクトは「都市の中に芸術空間を創出し、街に活気を与える」ことをコンセプトとする地域活性化型プロジェクトである。広島駅前の工事現場仮囲いに作品展示した第1弾に続き、第2弾となる今回は広島市中心部の地下街シャレオに作品を展示した。作品は日本と韓国の小学生に制作してもらった。作品を制作した日韓の小学生による国際交流行事も企画・実施した。作品展示、国際交流行事ともに多くの人々から支持・支援を得ることができた。また、これまでの活動をまとめた書籍も制作し、関係各所や全国の大学付属図書館に配布・寄贈した。本プロジェクトの活動を多くの人々に知ってもらい、各地での地域活性事業の手助けになればと願っている。

◆実施時期

作品展示：2010年2月21日～2010年5月31日、紙屋町シャレオ

国際交流行事：2010年5月19日、広島市立幟町小学校

◆参加人数

チーム構成員：21名

幟町小学校関係者（児童含む）：約130名

韓国・啓星初等学校関係者（児童含む）：約130名

国際交流行事出席者・関係者：約40名

参加総人員　約321名

第2弾「七色の奇跡―つながる未来―」広島市中区紙屋町シャレオ東広場周辺にて

日韓小学生による国際交流行事　広島市立幟町小学校にて

◆実施に伴う効果

・第2弾「七色の軌跡－つながる未来－」
作品前を通る人々にインタビューしたところ、好印象な反応が多く、特に子供達れの方には「街の中に芸術作品があると気持ちが和むし、良い」など好評を得ることができた。作品展示を通じて地域を盛り上げることができた。また、作品制作を通じて日韓小学生の国際交流にも貢献できた。
・日韓小学生による国際交流行事
日韓の小学生が顔を合わせて直接的に交流することで、作品制作時以上により実りの多い国際交流を実現できた。また、韓国小学生には広島観光もしてもらい、本プロジェクトの目的である都市活性化を観光の面から達成できた。副次的な効果として、支援いただいた団体の方々を招待することで、普段では関わり合いのない業種間での交流も図れた。その他、全体の活動を通して、学生の社会活動を促進し社会についての学習機会を創出できた。

◆苦労した点

・業務の実行主体が学生であるため授業やアルバイトなど時間的制約が多く、常に人員不足の状態で活動せざるを得なかった。卒業や就職活動による離脱も大きな問題であった。
・作品展示場所選定の際、公共空間に展示することが前提であるため、様々な制約が作品の内容に影響を与え、作品内容の決定に多くの時間を費やすことになった。例えば、展示の際の道路使用許可や可燃素材の使用不可、レンガ地の壁面への接着方法など。予算を圧迫する原因ともなった。
・韓国の小学生の広島招致では、宿泊先の確保や滞在時のタイムスケジュールなど行事自体とは直接的に関係ない部分の調整にも大変な労力を必要とした。この時期は特に人員不足が顕著であったため、行事内容の設定も含め最も苦労した時期であった。
・予算確保は、プロジェクト発足当時からの問題である。大学からの研究資金だけでは到底まかないきれず企業協賛を中心に資金調達を図ったが、不況も相まって協力していただけない企業も多くあった。

◆今後の課題・発展の方向性

・人員不足の解消と予算の安定的確保が最大の課題である。現在の組織体制では各人にかかる負担が大きいため、プロジェクト参加によって大学の単位を取得できるようにするといったような大学全体を挙げた体制づくりが必要であると考える。
・平成23年度は3カ年計画の最終年であるため総まとめの年となる。来年度計画では、芸術分野に携わる方々の交流から芸術による地域活性化の可能性を探っていく予定である。また、都市ギャラリープロジェクトをアクションリサーチの観点から学術的に分析・評価していく。

◆活動を終えての感想・意見等

学生を含め、プロジェクトメンバー全員のたゆまぬ努力がなければ実現することができなかった大きなプロジェクトだった。企業や行政、教育機関、財団など多くの方々からの支えも非常に大きな力となった。この場を借りて感謝の意を表したい。

今後は、このプロジェクトから得た成果を学術的にまとめ、学会などで発表する予定である。また上述した書籍（書籍名：アートプロジェクトにおける起業家チームの役割－都市ギャラリープロジェクトを通じた広島地域の活性化－）を通じて多くに人々に地域活性化について考えてもらえればと願っている。

活 動 名	団 体 名	よしじま職人工房
吉島地域の地元住民である町職人と 小学生が連携した「小学生のための物づくり体験」	地　　域	広島県広島市
	代 表 者	代表　安田 茂
	支援金額	32万円

活動概要

ほしいものが苦労せず安値で手に入る現在、大人も子供も物を作りだす力が少なくなってきています。

そこで、地域力を生かして、子供たちにものづくりのおもしろさを、ものを作りながら伝えていこうとするクラブ活動を、吉島の地域から集めて計画的に行っていこうと立ち上げました。

吉島地域には色々な製造業者があるなか、そこに従事しまたは今まで従事したものの現在は老後を楽しんでおられる匠が多くおられます。その地元町職人と小学生とが連携し、普段小学校では体験出来ない「ものづくり」を楽しく体験したり、科学に触れることにより、創造性、自主性、協調性を培っていきたい。

ひいては、理科が好きになり、将来「ものづくり広島」を担う人材づくりを支援する活動です。

◆実施時期

2010.6.19～2010.11.27

吉島公民館他

◆参加人数

主な参加者

・吉島小学校、吉島東小学校ほか生徒

・中原表具工芸社、三村松、土詩窯、ビクター、大道山竹炭工房　　参加総人員 244名

第１回マイ箸つくり（箸削り）　小刀で木を削る

第３・４回粘土でつくろうマイカップ
電動ろくろを使用

第５・６回水鉄砲･竹とんぼ･竹炭風鈴をつくろう
竹をのこで切断

第７回手作りスピーカーで音楽を聞こう
コイル巻き

◆実施に伴う効果

◆協力いただいた各企業に与えた影響

①協力各企業は自己の営業以外に、青少年の健全育成に役立ち社会貢献できていることを知ったことは大きな成果でありました。今後とも協力していただける基礎ができたと思います。

②小学校からは今後もこの活動を続けてほしい、出来れば小学校でやってもらえないかと言われております。

◆子どもたちに与えた影響

①地域に色々な技術を持っている企業があることを知った。

②ナイフなどの道具を使うときの危険性、他人に対する配慮など得る所が大きかった。

③マイ箸づくり、水鉄砲など殆どが初めての経験らしく、(学校や親から殆ど教えてもらったことが無い)初めはぎごちなかったが、回を重ねる毎にだんだん盛り上がり、物づくりに興味を持ち始めたことは大きな成果でありました。

◆新聞・テレビの影響

中国新聞、広島ケーブルテレビに取り上げてもらったことは、

①子ども達に大きな自信と誇りを持たせました。

②各企業にとっても企業イメージが上がり大変喜ばれました。

③われわれの活動を地域の方々にご理解いただき、今後の基盤づくりが出来ました。

◆苦労した点

・受講者募集

「キッズだより」で吉島・吉島東・中島小学校に　月1回　全児童に配布　計1,200枚

「公民館だより」で募集　月1回　吉島公民館管内の全戸に配布　計11,200枚

以上合計12,400枚配布しましたが、希望者1回15名がやっと、もともと関心が少ないか、工作品目に魅力がないのか、児童が塾やクラブ活動で忙し過ぎるのか、広報紙を読んでいないのか、募集が悩みの種でした。

・管理指導

6名のスタッフでは児童15名の指導管理が限界と感じました。実施に当たっては前記の通り希望者は、各回15名程度であったので丁度良かったとは言えますが、当初は抽選になる位応募があると予測していたので残念でした。

・危険対策

児童3名に指導者1人の配置とし安全管理に努めました。

レクリェーション保険に加入し万一に備えました。

・児童の工作能力

学校での教育には限界があり経験が非常に少ない。一昔前の子供と比べると能力はかなり下、最初はぎこちなかったが慣れるに従って上手になり、物づくりが好きになったと感じられます。

◆今後の課題・発展の方向性

今後の方向性

現在の活動がやっと根付いたところです。

今後、地元各企業・学校・公民館などと更に関係を密にして、活動　の継続と発展を期したいと考えております。

課題

最も大きな課題は資金であります。

財団法人マツダ財団様からいただいた支援金を費消した後、運営資金を如何にするかが最も大きな課題であります。

◆活動を終えての感想・意見等

この活動は、財団法人マツダ財団様のご支援を頂いたから出来たものであり、厚く御礼申し上げます。

関係各企業の協力を得ながら、事故もなく予定のスケジュールをこなせたことを感謝いたします。

今後、この活動を継続し更に発展させたいと考えておりますので何分のご支援の程よろしくお願い申し上げます。

活動名	団体名	カモミール～ラマシカ～
世界の遊びを体験してみよう！	地域	広島県東広島市
	代表者	代表　蘆田 智絵
	支援金額	10万円

活動概要

本活動は、地域の子どもたちに外国人留学生と日本人大学生が世界の遊びを紹介することによって、国際交流を行った。具体的には、外国人留学生が子どもたちに自国の文化や遊び、子どもの生活の様子を紹介し、子ども達と一緒に遊んだり、外国の生活を体験したりした。ロシア・ニュージーランド・オーストリア・オランダ・スウェーデン・ラオス・アルバニア・インドネシア・サウジアラビア・中国の留学生が参加し、子どもたちとの交流ができた。子どもたちは遊びを通して、楽しく交流することが出来た。また、教員を志望する日本人大学生が、活動内容の準備を行い、将来子どもたちに国際交流を推進するための経験を積むことができた。

◆実施時期　2010年5月、6月、9月～2月第3木曜日／3月5日（東広島市三ツ城コミュニティハウス）
2010年7月28日（尾道市立長江小学校放課後子ども教室）
2010年8月7日（玖波市公民館）
2010年9月23日／11月3日（広島市子ども図書館）

◆参加人数　児童・生徒128人
学生19人
留学生20人（ロシア・ニュージーランド・オーストリア・オランダ・スウェーデン・ラオス・アルバニア・インドネシア・サウジアラビア・中国）　　参加総人員 167名

ロシアの留学生と遊びを通して交流

世界地図で確認

オーストリアの留学生と遊びを通して交流

ラオス語で自分の名前をかいてみよう

◆実施に伴う効果

・子どもたちは、多くの留学生と出会い、一緒に遊んだり話したりすることができ、世界の様々な国や文化への興味・関心をもつことができました。また、留学生と一緒に遊んだことで、子どもたちは楽しく国際交流をすることができ、「もっといろいろな国について知りたい」と話していました。はじめて会った留学生と一緒に遊ぶうちに、笑顔で話ができるようになり、楽しい思い出をつくることができました。
・留学生にとっては、日本の子どもと一緒に遊ぶ機会はあまりないので、とても良い機会でした。今後も、母国と日本との交流を続けていきたいという思いが強くなったという感想もありました。
・はじめて留学生と交流する日本人学生も多く、学生にとっても国際交流をする機会になりました。また、活動を行ううちに外国の文化や考え方の違いなどを知り、国際交流への関心がさらに強くなりました。

◆苦労した点

・活動に参加してくれる留学生を探すことが大変でした。
・遊びに使う道具などが、日本にないものであることも多かったため、日本であるもので代用するか、外国から郵送してもらう必要があり、大変でした。参加した留学生は、皆、とても良い経験をしたと感想を述べてくれました。
・日本人学生と留学生とが一緒に活動内容を考えていくにあたって、留学生とのコミュニケーションの難しさを感じました。言葉の違いはもちろん、考え方や文化の違いなどから、なかなか上手くコミュニケーションがとれないこともありました。しかし、そのような経験があったからこそ、考え方や文化が違っていても、一緒に楽しい時間を過ごすことが出来るということを、身をもって経験することができました。活動後には、留学生と日本人学生の絆が深まったと思います。
・参加者の年齢が幼児から中学生までと幅広いときがあり、異なる年齢の子ども達に共通して興味をもってもらえるような内容を考えるのが難しかったです。

◆今後の課題・発展の方向性

・活動内容の充実
子どもたちが出来るだけ、留学生と一緒に遊び、ふれあう機会が多くなるような活動が出来るように、活動内容を考えていきたいです。また、遊びのルール説明などを、子どもたちに分かりやすく説明することや、外国のものや写真などの提示の仕方を工夫することで、さらに子どもたちが外国に関心をもてるような活動内容を考えていきたいです。

◆活動を終えての感想・意見等

活動をはじめる前は、実現できたらきっと楽しそうだと話していましたが、実際に私達にできるかという不安もありました。マツダ財団様にご支援いただき、この夢を実現することができました。活動をすすめていくうちに、どうしたら子どもたちに楽しんでもらえるか、留学生と子どもたちが出来るだけ多くふれあい、楽しい活動にするには、どんな準備をしたらよいのか、活動中にどのような点に気をつけたらいいのかが少しずつ分かってきました。また、子どもたちや留学生が笑顔で進んでいる様子をみて、この活動を実施することができて本当に良かったと思いました。私達ボランティアスタッフも心から楽しむことができました。このような貴重な機会をくださった、マツダ財団様に心から感謝いたします。ありがとうございました。

活動名	団体名	創作合唱オペラ「いのうもののけ」公演実行委員会
創作合唱オペラ「いのうもののけ」公演（初演）	地域	広島県三次市
	代表者	実行委員長　前田 茂
	支援金額	30万円

活動概要

市民から出演者を公募し、演技指導者は専門家を招聘して1年間かけて行う。この地域の明るい物語として制作し、合唱や語りによる地域に根ざした市民参加の芸術・文化に仕上げていく。

① 作品名：創作合唱オペラ「いのうもののけ」
作詩・脚本：村田さち子　　作曲：池辺晋一郎

② 総監督・指揮者：池辺晋一郎　　監修：村田さち子
音楽監督：内田陽一郎　演出：井原広樹　舞台監督：田和伸二
合唱指揮：谷千鶴子
地元指導者：三待美早穂　三上和伸　丸山朋子　野田英子　重頭恵美子　安部祥子

◆実施時期　2011年3月26日（土）　開場／18:00　開演／18:30
2011年3月27日（日）　開場／13:30　開演／14:00
三次市文化会館　大ホール

◆参加人数　指導者（地元含む）　9名
ソリスト　15名
合唱団員　大人（女声）24名　・　大人（男声）16名　・　子ども　30名
実行委員　16名
参加総人員 110名

公演の一場面より　村人と子どもたち

ひょうたんのもののけ「ひょうたんたん」

魔王と　もののけたち

フィナーレ「平太郎讃歌」

◆実施に伴う効果

今までは日頃活動している合唱団で個々の活動が多く他団体と長きに亘って一緒に活動することがなかったが、今回多数の合唱団が参加していただいてそれぞれ交流の輪が広がり、お互いの演奏会や機会があれば同じステージで演奏したいなど今後益々活動の場が広がっていきそうである。また、「もののけ」初演終了後地域の合唱団に入団された方も何人かあり、舞台を皆で創る楽しさを感じていただき県北の合唱も活発になりそうである。

観に来られた多くの方から「三次でこんなにスケールの大きいオペラが本当に出来ると思わなかった」といっていただき、市民有志の一言から始まった企画が盛大に終わって今後の活動の自信に繋がった。既存のグループ「もののけプロジェクト」にとっても今後の活動に弾みがついた。

◆苦労した点

（予算）

合唱オペラと言う事もありソリスト以外の合唱団員の人数が総勢70名参加ということで通常のオペラに比べ衣装代が掛かり、舞台関係（舞台・照明・衣装）の予算が当初より大幅に増えた。また、当初練習日程を月2回程度組んで謝金・交通費・会場費等予算を挙げていたが、オペラ未経験者の参加の方が多く初演ということもあり初めは音取りなどに時間を費やした。また諸般の理由により第1回の練習日が大幅にずれ込み、練習回数が大幅に増えた。ソリストは個々に、また合唱団員は大人と子どもが別々に練習することが多く、全体を通しての練習が足りず演出家やソリストも含めた全体練習を急遽入れた為の謝金や交通費、会場使用料の予算・練習会場の確保と苦労が多かった。

（外部へのPR・地域の理解）

オペラということもありなかなか馴染みがなく、また三次に伝わる「稲生もののけ伝説」の知名度も低く地域の方々に理解していただけるまでかなり時間が掛かった。県北では文化意識が低く色々な意見もいただいた。チラシを配ったりポスターを貼っても活動事態知らない方も多く、地元のケーブルテレビや広報誌・新聞紙面にPRしてもらい少しづつ認識されるようになった。参加者一人ひとりの声掛けに多くの理解を得られるようになった。

（参加者）

ソリスト・大人の合唱団員は多方面の方のご協力をいただき人数を集めることができたが、子どもの合唱団員の参加申し込みが少なく人数確保に苦労した。市内各小中学校を手分けしてお願いに歩いたが、温度差もかなりあり一般から思うように集まらなかった。地元児童合唱団に初演までのスケジュールを調整していただき合唱団をあげて参加していただいた。実行委員も有志で集まり少人数ながら4年間活動をしてきた。当日スタッフとして多方面の方々にお手伝いいただいた。

◆今後の課題・発展の方向性

今回のオペラ初演公演1回で終わらないよう、三次の宝として作品を三次市に委嘱し今後三次市から全国へそして世界へ色々な場所へ発信していけるものと確信している。今回参加した合唱団員も今回で終わらず交流を続け活動の場を広げて次回公演の機会があれば参加していく。 また、「もののけ」に関わる他団体も県内外にあり交流を深め”三次もののけまつり”では仮装して商店街をパレードして歩く祭りがあるが、オペラで参加した合唱団員も舞台での衣装を着けて参加したいなど色々な形で関わって広く多くのかたに「もののけ」をアピールしていきたい。

◆活動を終えての感想・意見等

多くの方々のお力添えにより初演公演を盛大に終えることができ実行委員一同感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。実際には脚本家の「もののけ」の取材から始まり足掛け5年、団員募集・ソリスト募集・オーディション・練習調整など、少人数かつ音楽と無縁の実行委員がメンバーで、慣れない事解らない事が多く失敗や苦労の連続でした。予算も少しづつ膨らみ、チケット販売も最初思うように売れず格闘の日々でしたが、実行委員と指導者・合唱団員が少しづつお互い理解を仕合ながら初演を終えることができました。この公演を通して多くの方々とご縁をいただいた事が私たちの財産となりました。温かい応援ほんとうにありがとうございました。

活動名	団体名	ええじゃん(Asian)
若者と描く「多文化共生のまち廿日市」の夢	地域	広島県廿日市市
	代表者	代表　栗林 克行
	支援金額	30万円

活動概要

廿日市市はもともと海外移民も多く、国際的観光地「宮島」もかかえた町で、市内在住外国人も1,000人(中国・韓国・フィリピン・ブラジル人等)を超えようとしている。しかし、彼等のニッポン生活は厳しく、日本人とのトラブルも発生している。そこで、我々のこれまでの市民レベルのお付き合いを一歩進め、彼等の生活に正面から向き合い、トラブルの解決と予防のため何が必要で、何がネックとなっているのか、外国人、大学生、市民スタッフ協働で調査し、地元企業や地域社会にも具体のシステム改善を含む提案を行った。

◆実施時期

2011年2月19日(土)14時～17時
廿日市市市民活動センター大ホール

◆参加人数

参加総人員 50名

「多文化共生の町・はつかいち」市民フォーラム

◆実施に伴う効果

・「外国人相談」は、昨年度16件の相談を受け、何とか対応出来て本人に喜んで頂いたと思う。その内容が多岐にわたるため、その都度窓口を訪ね、専門家の知恵を借り、結構労力の要る仕事ではあったが、「ええじゃん」の活動の原点であり独自性を発揮できる仕事だけに、今後も続けていきたい。
・「アンケート調査」は、廿日市市、国際交流協会、商工会議所、町内会連合会等と度々協議し、その協賛を得て実施しただけに、地域の話題となり、特に廿日市市旧市内の町内会長からの回収率は63％と高く、在住外国人問題に対する関心を高めたと思う。
・「市民フォーラム」は、上記アンケート調査の結果報告に併せて在住外国人問題全般の協議を行った。外国人と日本人市民に学者や弁護士等も加わった中で、身近なテーマ別のワークショップを行ったところ、外国人と膝を交えての本音トークに新鮮な驚きの声が聞かれ熱が入り、3時間のフォーラムで途中退席者がほとんどいなかった。会場内でもその後にも「とても内容のある会だった！」との反応であり、ひとつのハードルを越えた達成感がある。これを今後につなげたいと思っている。

◆苦労した点

在住外国人の実情把握が困難―個人情報保護絡みで役所や町内会から情報が得にくい。
在住外国人（研修生を含む）を雇用する企業の秘密主義。
在住外国人への広報が困難―多言語対応が困難。伝えられるメディアが少ない。
我々市民団体に対する信頼が低い。

◆今後の課題・発展の方向性

バリアフリー現地巡回・体験会
　名称：多文化共生の町・はつかいち現地巡回体験会（仮称）
期日：2011.8.14（土）　予定
参加：廿日市市周辺在住外国人および日本人住民
目的：外国人目線での現地体験・防災訓練と意見交換会を行う。
対象：病院、消防署、あいプラザ、企業、リサイクルセンター、市民活動センター等

◆活動を終えての感想・意見等

　平凡な外国語会話の教室から始まった市民活動でしたが、大勢の外国人・日本人市民に支えられて、何時の間にか、市民レベルではあるが在住外国人とのトータルな関係を築こうという活動にまで成長してきました。 そして、特に昨年度のマツダ財団の助成は、この小さなボランティアグループを支え大きな力を与えて頂きました。心から感謝申し上げます。

活動名	団体名	スイゲンゼニタナゴを守る市民の会
スイゲンゼニタナゴを知ろう！守ろう！ ～郷土の生きた宝ものを地域で守る～	地域	広島県福山市
	代表者	会長　蔵本 成洋
	支援金額	30万円

活動概要

・スイゲンゼニタナゴ啓蒙下敷きを1,000枚作成し会員・マスコミを通じ頒布した。
・スイゲンゼニタナゴの保護を訴える缶バッジ1,050個を作成し、一部頒布した。
・スイゲンゼニタナゴの生態をビデオ記録したものをＤＶＤにした。
・芦田川の魚調査（主催：めだかの学校）において下敷きのパイロット版を用いて、
　参加したこどもたちと魚種の同定を行った。

◆実施時期
2010年度全体を通じて取り組みました。

◆参加人数
・下敷き、缶バッジ、ＤＶＤの作成。芦田川の魚調査での指導…2名
・下敷き、缶バッジの頒布…21名

参加総人員　23名

パイロット版下敷きを持つ芦田川の魚調査参加者

採集した芦田川の魚を同定する様子
下敷きの写真と見比べる

下敷きの完成を喜ぶ
スイゲンゼニタナゴを守る市民の会会員一同

完成した下敷きをもらい喜ぶ中学生

◆実施に伴う効果

目標であった「スイゲンゼニタナゴの形態, 生態, 生息環境等について, 下敷, 映像などにわかりやすくとりまとめ, 地域のイベントや学校行事等で次代を担う子どもたちに普及啓発を行い, 地域と学校が連携した自然環境の保全の取り組みを促進する。」に対して

①地域の環境学習をしている子どもたちによる芦田川の魚調査において、パイロット版の下敷きを活用したことで、一目で魚種の同定ができることから重宝がられた。

②下敷きの頒布が多くの新聞等で紹介されたことで、スイゲンゼニタナゴの存在を広く啓発できたと同時に、通常ではその存在を知ることが困難なスイゲンゼニタナゴに興味のある子どもたちに直接下敷きを渡すことができた。

③スイゲンゼニタナゴの保護について活動している本会(スゲンゼニタナゴを守る会)の会員にとって、具体的な啓発ツールを持てたことで、子どもたちや地域の人たちに直接会って、啓発活動することができた。

◆苦労した点

下敷きを耐水性として水辺での使い勝手を良くしたり、缶バッジの種類を5種類としたりして費用が高くなったが、助成金をできうる限り作成費用のみに当てるため、下敷き、缶バッジのデザインをすべて自前で行った。その結果、デザインが完成するまでに時間がかかり、年度内の野外活動等で、完成した下敷き・缶バッジを使用できなかった。

◆今後の課題・発展の方向性

下敷きが大変好評で、手元に当会の活動で使用する200部を残して、全てもらわれていったが、さらに「是非、欲しい」との問い合わせが続いている。増刷の必要があるが、金銭的に難しいので改めて助成金を得られるよう活動する必要がある。

当会の会員には淡水魚全般に造詣の深い者から、「スイゲンゼニタナゴについてはよくわからないが地域の生きた宝ものを何とか守りたい」という者まで、いろんな意識の者がいる。これまでは、スイゲンゼニタナゴという希少種の学習会といった性格の集まりが主であったが、今後は、作った下敷きを使って、まず会員が地域の水辺の生きものに直接ふれる機会をつくっていきたいと考えている。

◆活動を終えての感想・意見等

おかげ様で、当会の活動ツールを作成させていただき、会の活動を活性化することができましたし、下敷きについては広く新聞などでも取り上げていただいたので、スイゲンゼニタナゴについての啓蒙が進んだと実感しています。これもマツダ財団の助成金を得られことがあってのことです。本当に感謝いたしております。

私たちは、せっかくいただいた貴重な助成金を一過性のイベントではなく、将来への持続的活動を担保するためのツール作成に使わせていただきました。こんな使われ方が許されるなら、募集時の事例の中にそのようなものがあれば、そんな使い方をさせていただきたい団体がエントリーしてくるのではないでしょうか。

活 動 名	団 体 名	こどもの広場実行委員会
こどもの広場	地　　域	広島県広島市
	代 表 者	代表　遊井 勝美
	支援金額	20万円

活動概要

1.中学生の企画運営による異年齢交流･地域交流
2.中学生の居場所づくり
3.小学生の居場所づくり
4.科学教室
5.地域行事への参加

◆実施時期

H22.4.18～H23.3.24
古市公民館･大町児童館･安川緑道･大町集会所

◆参加人数

小学生　768名(幼児を含む)
中学生　203名
大学生　 11名
大人　　437名

参加総人員 1,419名

みんなで相談しながら作っていくって楽しいネ
(積み木の教室)

夏祭りのメイン　びっくり屋敷 しかけ作りが大変
(夏祭り)

意外に難しい　しめ縄飾り　親子で頑張るぞ
(しめ縄飾り教室)

昔の人はこうして餅をついてたんだ！！
(餅つき大会)

◆実施に伴う効果

1.中学生の企画・運営する夏祭りに地域のものが参加する事により、中学生と地域がより身近な関係になった。
2.高齢者のために干支の折り紙の飾りをプレゼントして一緒に触れあった。涙して喜ばれた高齢者の方もいた。その後も大切に家に飾られている。
3.中学生が参加することにより、地域のまちづくり事業が活発になった。

◆苦労した点

・大人の地域性
・中学生の企画運営する事業は、学校の行事やクラブ活動との調整を行いながらの活動なのでなかなか思うように準備が出来ない。
・上記の理由でPR活動も十分にできなかった。

◆今後の課題・発展の方向性

・中学校は二つの地域を含む。今までに一緒に事業を行う事が少なかった。地域性もあり大人のつながりを作る事はまだまだといえる。今後の課題である。
・中学生の持っているものをいかに引き出し、自信を持たせるか、また、どのように地域で育てていくかが課題である。
・子どもも大人も一緒に楽しめるものを今後取り組んでいきたいと思います。仲良くなる、声を掛け合う事が出来るようになる事で、色々な効果が生まれ、町が生き活きとしてくると思われます。

◆活動を終えての感想・意見等

・3年間、支援をいただきありがとうございました。今後は地域にある団体と協力し、一緒に子どもたちを育てていこうと思います。
・貴社の益々のご発展をお祈りします。今後機会がありましたらまた、よろしくお願いいたします。

活動名	団体名	もりメイト倶楽部Hiroshima
子ども森林ボランティア養成講座 「もりメイトキッズ」	地域	広島県広島市
	代表者	会長　見勢井 誠
	支援金額	40万円

活動概要

森林整備体験をしながら、森の大切さ、まもり方を学ぶイベント開催(年4回)
対象→主に小学生とその家族

森はわたしたちの宝物！
家族と一緒に、地域と一緒に、森づくり活動体験を通して、豊かな心と森を育てていきましょう！
(荒れた森を、子ども達と共に、整備を進め、森づくりを考え、森の生き返る様子を実感する。)
→『感育』『楽力』『食育』をテーマに入れて、五感を使って感動・感性・感謝の気持ちをはぐくむ「感育」をはじめ、ものつくりを楽しむ力、健全な食生活を実践できる体験教育

◆実施時期　第1回 6月13日(日)　→雨天のため延期、第1回　8月1日(日)
第2回 10月3日(日)
第3回 12月5日(日)
第4回　3月6日(日)
広島県大竹市松が原町の私有林(会員所有)「松ヶ原フィールド」

◆参加人数　8/1 →29名　10/3→58名
12/5→53名　3/6 →67名　参加総人員 207名

「もりメイトキッズ」 集合

「もりメイトキッズ」 学習風景

遊べる森をつくろう！　バランストレイル

「森と動物とぼくらの食べ物事情」 パン作り

◆実施に伴う効果

参加者は大変満足し、楽しみ、学びがあったと評価。普段の生活では見られない積極的な姿が見られた、など保護者の評価も高い。

スタッフ ： 研修をして、実践することによるスタッフのスキルアップ。
交通費、研修を助成していただくことにより、スタッフのモチベーションもあがり活動の質も高まる。備品や材料費などのおかげで、満足なプログラムを、提供できた

学生スタッフ ： 小グループを担当し、こどもたちと密に関わることで、子どもたちの満足感、安心感が高まった。学生自身も、はじめて森で活動し、新たな感動と、市民活動の意義を感じ、成果を得たと大学関係より感想をいただいた。

地元 ： 廃校となって寂しくなった里山に、大勢のひとが遠方より訪れることにより、地域も活性化。子どもたちの声が響くことだけでもなによりありがたい、とコメントをいただいた。来年度はさらに関わりを深め、地域振興会より毎回参加、郷土料理を交え参加者ママとの交流を企画し、発展させる。
チラシをきちんとつくることができたので、広報に役立った。
助成にマツダ財団の名前があることで、活動に評価がいただけます。他の企業にも協力のよびかけがしやすかった。

◆苦労した点

地域への協力要請、PR、大竹市や廿日市市などの森林系や、子育て系の市民団体と協力連携した活動をしていきたいと思うが、実際に動き回る余裕がない。
主なスタッフは、仕事をもっており、時間が不足。若手スタッフを育てる必要がある。

◆今後の課題・発展の方向性

役割分担 → プログラム各内容でリーダーをきめ、リードする。
昼食準備を参加者ママ等も加わり、里山の料理や 地元のおかあさんとの交流の場とする。
子ども達は、遊びたい。その気持ちを大切に、プログラムをつめこみすぎず遊ぶ時間を設ける。
参加しやすい体制、年会費は廃止、料金も一律1,000円に、シンプルにする。
参加者へ報告や案内送付等したが、スタッフの手間をへらすためメールでやりとりする、密に情報提供する。
地域より、地域振興会と連携する。森の名前を地元の産直市とおなじ「わくわく」をつけイメージ統一。地域振興会長に毎回、地域の紹介に登場要請。

課題: 地域と若手リーダーの発掘、育成

◆活動を終えての感想・意見等

助成いただいたことで、4年目の活動を実施することができました。一年間、事故もなく、参加者も笑顔で終えられました。おかげさまで、スタッフは交通費とイベント時は食事つきのボランティア活動にできました。
2011年度も五年目として活動に入りました。
今後ともよろしくお願い申し上げます。

活動名	団体名	Global Bridge
ONE HOME PROJECT(ワン・ホーム・プロジェクト)	地域	広島県広島市
	代表者	代表　山崎 唯美
	支援金額	20万円

活動概要

目的：広島市に来ている留学生が、地域の中で日本と自国の文化背景の理解を深める
また、留学生と子どもたちの交流を通して、お互いに、尊重しあい理解する心を育むことで、
多分化共生社会の実現に努める

内容：①日本に来ている留学生が、公民館などで、地域の小学生に向けて
（母国の文化、食べもの、学校生活など）を話してもらう
②日本人スタッフが事前に留学生と打ち合わせをして、内容を決めていく
③当日は、留学生(1人)、日本人(3人～4人)で小学生に対して企画を行う
④終了したら、子どもたちには、アンケートを記入してもらい、
日本人スタッフと留学生が省察をして次回の企画に反映させる。

◆実施時期
段原公民館

◆参加人数
スタッフ　9人(1回目5人、2回目4人)
子どもたち　29人(1回目15人、2回目12人)
保護者　2人

参加総人員 38名

国の様子を教えてもらってます

カンボジアの国旗について説明中

留学生が小学生にピロシキを教えてます

作った料理をみんなで試食中

◆実施に伴う効果

・子どもたちの保護者の方から、地域の中で、こういう企画をすごく待っていたと喜ばれました。
・留学生の方と接する機会があまりないので、楽しかった(子どもたちからの感想)。

◆苦労した点

・自分たちだけの企画ではなく、他の団体の方たちとも予定を調整していくことが難しかった。
・留学生の予定がつかめず、途中でキャンセルされたりしたこと。
・省察や小学生に学んでもらいたいことが浅かった。

◆今後の課題・発展の方向性

・他の団体の方、留学生の予定をきちんと把握して予定をたてる。
・もっと留学生の方との交流が小学生にどのような形で残るのか成果が分かるように、企画を作っていきたい。

◆活動を終えての感想・意見等

この企画に関わってくださった方々に本当に感謝しています。ありがとうございました。
マツダ財団さんには、相談をした時にいつも親身になってくれて本当に嬉しかったです。ありがとうございます。
この企画の重要性を改めて感じましたので、頑張っていきたいと思います。

活動名	団体名	ほんわかプロジェクト応援団
学生ボランティア「ほんわかプロジェクト」の定着と実践活動への支援	地域	広島県広島市
	代表者	比治山大学　教授　石井 眞治
	支援金額	42万円

活動概要

ボランティア活動を志す大学生に対し、社会的に意義の高い「がん検診受診啓発」活動を中心に、年間を通して一般市民との関わりの高い活動への参加機会を案内し、円滑にゆくよう後方支援をしている。なお、大きな目的として、在学大学単位でなく他大学の仲間達と合同で活動してもらい、その過程からお互いのコミュニケーション能力を高めることを掲げている。活動が一般社会人を対象とすることや、趣旨説明が主になることから、かなり気をつかうものであるが、事前学習を複数回行うことや、大人達が後方支援をきちんと行うことで、学生各自の感性をより豊かにできると考えている。

◆実施時期 平成22年度の通年　5月に打合わせと勉強会を開始、6月から一般市民対象に、啓発活動を開始した。

○がんに関する勉強会　5月から10月にかけて、5回開催　場所:　広島市内

○22年6月以降23年3月までに複数回開催された、がん医療の知識及び早期発見の重要さを知らせるフォーラムや公開講座などに、運営側及び活動説明側として参画する機会を設けた。
場所:広島市が大半　一部は廿日市市開催も含む

○10月、11月には、在学する大学で開く大学(学園)祭で、テント及びブースを設け、多数の来場者に向けて学生が主役となって受診啓発の活動を行い、応援団も参加した。
場所:　広島市内

○22年9月には、安芸太田町で開催されたウルトラ(過酷という意味)マラソンに、運営ボランティアの要請を受け、住民が発案・運営する大規模な地域興し行事への支援として２大学の学生と共にボランティア参加し、都市部の若者が呼応したことで地域への良い刺激となった。
場所:　山県郡安芸太田町

◆参加人数

①グリーンバナナ・プロジェクト	6/20	210名
②がん医療に関する勉強会	9/15	25名
③安芸太田しわいマラソン	9/19	(ランナーは260名)
④がん医療に関する勉強会	10/4	31名
⑤ピンクリボンフォーラム	10/16	280名
⑥がん医療に関する勉強会	10/25	(広島大学) 10名
⑦大学(学園)祭	10月～11月	ブースへの来場者多数(計測していません)
⑧市民公開講座	3/6	530名

延べ参加総人員 1,086名(計数分のみ)

宮島大聖院啓発イベント後

「しわいマラソン」前日のボランティア学生

比治山大学での啓発活動 2010

女学院大学での啓発活動 2010

◆実施に伴う効果

在学する大学の学生達に、社会的な意義の高いボランティア活動の一例を具体的に示してくれる価値があると、大学幹部や学生担当職員から好意的な意見を得ている。

そして、がん検診受診を呼びかけ、たいていが夕方から開始される「勉強会」に積極的に参加し、熱心に聴き入る学生達を見て、「患者や家族でもない立場なのに、みんなのためにと頑張ってくれている姿にすごく感激した」とか、「これまで自分ががんに罹患していることを周囲に言えないでいたが、啓発活動に取り組む学生達の姿に驚いた。そして、暗く悩むのをやめて、自分の辛い経験や不安な心情を話したら、なにか役立つはずだと思う勇気が湧いた」と、会の終了後に言ってくれる方が複数おられ、受診啓発以外にも良い影響を及ぼす活動であることに我々も驚いた。

また、「安芸太田しわいマラソン」の支援では、かなり負荷の高い役割を快く担った。「広島市から手伝いに来てくれた学生達のてきぱきとした姿勢に周囲が刺激された。立派な若者達で感心した」との地域住民及び役員からの感想を、後日の反省会の場で聴くことができた。次回開催を動機づける一助になるかもしれない。

もちろん学生達にとっても、初対面の大人達に接し共に汗する過程で体得したコミュニケーション能力も大きかったと、帰路の車中の会話から実感できた。

◆苦労した点

幸いほとんど困ったことがなかった。これまでの活動の下地もいくらかあり、明解な目的意識を持った学生が集まってくれることと、応援する人達が大きな苦労を経た経験者であるため、温かでなにより学生達の志に敬意を持って臨んでくれることが力になった。

中には無関心な市民もいるが、これはしかたのないことで学生達もきちんと消化させている。

◆今後の課題・発展の方向性

学生は就職活動や卒業論文作成など、在学年次で大きな事情変化がある。このため、参加の意欲は高いものの、実際の参加は困難になるなど、この活動に限らず意志の承継が課題となる心配は続く。

大きな災害が生じた後には、災害ボランティアの編成などの気運が高まりやすい。当応援団もテーマのひとつにしているが、志のある若者たちの意向を実行に移すために、地域や関係機関との交渉などに慣れた大人達が支援してゆくと、無理や無駄のない支援体制が築けると思う。

大きな規模を狙わずに、身動きのよい規模で編成できると思う。

◆活動を終えての感想・意見等

「活動の場は多い方が良い。自分の大学内での活動に留めてほしくない」との考えから、一般市民や患者と接する場をかなり設定してきた。前述した活動報告はその一部だが、学生達の熱心さと、それを応援する人達の温かな視線に安堵し、不安をほとんど感じなかった。

ただ、がんと闘う最中の人や不安を抱える家族との接触は、かなり神経をつかう連続であるため、全く性格の異なる「ウルトラマラソン」の支援に臨んでみたが、前日の作業後わずかの仮眠をとって、未明からの仕事に行くなど、予想の数倍の激務だったことに苦笑した。

ただ、携わった学生達から不平や不満が発せられることがなく、優れた人柄の若者と協働できたことは、私達応援する側にとっても大きな意義をもたらしてくれた。

さて、従来に増した活動機会と活動人数増を可能にできたのは、貴マツダ財団による支援があってこそ。今回活動に臨んでくれた若者（学生）達が努力したことが感謝され、「生き方を変える契機となった」との言葉を胸に実社会に出てゆく成果となった。

あらためて、貴財団の支援に心からの感謝を申し述べる。

活動名	団体名	特定非営利活動法人　ワーカーズコープ広島支部
中高生ボランティア育成	地域	広島県安芸郡
	代表者	支部長　佐藤 康浩
	支援金額	32万円

活動概要

中高生が各行事の企画･運営に主体的に参加し達成感や充実感を味わう。また、各行事の中で、地域の人との多世代交流を通して自分たちが住んでいる地域を再発見することを目指します。
実施活動内容は、以下の通り。

①体験･講座ＳＴＥＰ１「知る×広がる」
②体験･講座ＳＴＥＰ２「こだわり×ライフワーク」
③運営･実施ＳＴＥＰ３「エコ×未来」
④運営･実施ＳＴＥＰ４「祭り×地域」(台風の為中止、11月7日の工作･アートフェスタ参加)
⑤運営･実施ＳＴＥＰ５「クリスマス×企画力」
⑥運営･実施ＳＴＥＰ６「ＬＩＶＥ×企画力」

◆実施時期　6月、7月、8月、12月、1月
児童センター、公民館、南区民文化センター、
ひろしま市民活動ネットワークHEART to HEART

◆参加人数　ＳＴＥＰ１(7名)
ＳＴＥＰ２(23日3名　25日11名)
ＳＴＥＰ３(18名の内小学生9名)
ＳＴＥＰ４(工作･アートフェスタ参加5名)
ＳＴＥＰ５(9名、来館者約150名)
ＳＴＥＰ６(30名、来場者200名)　　参加総人員 83(433)名

『知る×広がる』

『こだわり×ライフワーク』

『エコ×未来』

譜宙雷舞集合写真

◆実施に伴う効果

今回の講座を通して多くの効果を得ることができた。特に目立ったのは、参加者である中高生だ。当初は、企画？ボランティア？といった様子だったが講座後半からは、参加者同士が認め合いその人に合った役割を見つけ出し責任をもって進める姿が見られた。また、消極的だった当初より意見も出し合う様子も見られるようになってきた。後半のクリスマス会では、これまでのネットワークを活かした団体との出演交渉や事業が終了してからの事も考えられるようにもなってきた。(外にゴミが落ちてないかを確認など)

活動を通して参加者より「ありがとう」「楽しく参加できました。また企画頑張ってね！また参加するから！」「高校生でここまで企画できるってすごいね」と、たくさんの励ましの言葉も頂いた。中高生のアンケートからは、「初めての経験ばかりでとまどったがお礼を言ってもらいとてもうれしかった。また、企画に携わりたい」「学校の生徒会や文化祭よりも大変だったがその分やりがいを感じることができた。将来、子どもに関わる仕事がしたいと思えた」「毎日の風景がモノクロだったがみんなと出会えて毎日が新鮮で生きているって実感できた」など当初に比べ大きく成長していることを実感できた。地域の方々からの周知もされ始め活動に理解を得ることもできた。また、広島市の民生児童委員の方々も見学に来られたりなどもあった。現在、児童センターバンビーズにて中高生委員会(ジョイントフェローシップ)として、センター行事の参加、映画の作成などを行っている。

◆苦労した点

対象が中高生とあって参加者の確保が難しかった。学校、部活、バイトなど一日の中での時間調整も苦労した。また、興味が持てるようなキーワード、チラシのデザインなどにも苦労した点だ。

◆今後の課題・発展の方向性

課題：連続講座なので開始から参加できるよう工夫が必要だと感じた、また人数確保も課題で今、何について知りたいかなど事前のヒアリングをおこないニーズに合ったプログラムを考えていきたい。

発展・方向性：現在、センターの中高生委員会(ジョイントフェローシップ)に入り新たな行事を企画中。今後の方向性としてセンター行事だけではなく地域の行事に積極的に参加していきたいと考えている。

◆活動を終えての感想・意見等

中高生という思春期まっさかりの対象とあって終始、苦労が絶えなかったが日々、成長していく姿をみて担当者も多くの事を学ぶことができた。当初、小学生が話を聞いてくれないからふて寝したと言っていた高校生も現在は、会計担当として大事な役割をこなしている。毎日が楽しくない、明日地球が滅んでもいいと言っていた子も企画の主担当として全体を把握しテキパキと指示を出している。どの子も児童センターを居場所として認識しており、センターを通じて多くの友人、知人をつくることができたようだ。今後、同じような活動を様々な団体がおこない中高生の居場所につながっていけばと思う。また、このような活動をしている団体がネットワーク構築できる環境ができればと考えている。

活 動 名	団 体 名	大学環境ネットワーク協議会(UE-net)
エコ学習の実践	地　　域	広島県広島市
	代 表 者	会長　森嶋 彰
	支援金額	32万円

活動概要

子ども達が、環境問題について自分から進んで取り組んでもらえるように、県内の大学生が協力しあい、子ども達の興味をくすぐるような教材を製作し、また、実際に小学校などに出向いて、一緒に体験してもらう機会をつくることで、子ども達の取組だけでなく、家族をまきこみ、家族全員で環境について考え、取り組んでもらえるような活動を行う。

◆実施時期　通年(6/6～3/5)
広島県内各地(広島市、廿日市市、三原市、江田島市)

◆参加人数　(準備作業や打ち合わせを除く主な活動参加者(延べ)
＜当団体とその関係者／一般等参加者＞)

①環境講座		＜22人／70人＞
②エコショップ発掘調査		＜約50人／省略＞
③水生生物調査	2回	＜5人／35人＞
④･環境イベント参加	4回	＜55人／展示等を含めると数百人規模＞
･小学校出前講座	2回	＜4人＞

エコマップ調査
フェアトレード店のカフェパコにて

教材作成の様子

水生生物調査　広島市佐伯区にて

環境に関する体験講座

◆実施に伴う効果

・内容と同時に「大学生のような世代が活動を行う」ということについて、その社会的な意義や、子どもたちが感じる親しみやすさについて、高く評価いただいた。
・2年間継続して助成していただいたことから、次の学年や他の大学に、活動のノウハウの移転を行ったり、新たな工夫を試行することができた。
・大学以外のいろいろな方と接する機会が得られた、ネットワークが広がったり、大学生が自ら、他と接するノウハウを持つこと等ができたことから、今後も様々なパートナーシップによる活動が考えられる。例えば、活動期間の終盤に東日本大震災があった際も、紙屋町交差点付近での街頭募金の活動をいち早く実施することができた。

◆苦労した点

2年目であり、今後の活動の展開を考えて、経験の未熟な学生も多くチャレンジしたが、不慣れな分、準備不足や(細かいところだけど)うまくいかなかったことなどがあった。

予算や活動の工程管理がうまくいかずに、広島県やEPOの方にサポートしていただく事が多くあった。

今年の活動にマツダ財団の助成を受けていたり、設立の際に広島県の予算の支援を受けたことなどを明示していたところ、小学校などから「何でもUE-netの予算でできる」と誤解された。消耗品ならまだしも、文房具などの道具まではなかなか準備できないことが、なかなか伝わらなかった。

エコマップについては、直接お店屋さんのご商売に関わる事であり、うまく意図を伝えて快く協力してもらうノウハウは、なかなか習得するのに時間がかかった。EPOでいろんなシュミレーションをさせてもらって、なおかつ、「ひろしま市民活動ネットワークHEART to HEART」で実際にヒアリングして、その様子をさらに、EPOのスタッフが聞いてきてくれて、注意を受けるといったことまでしたのに、最初に行った商店街のお店屋さんでうまくヒアリングができずに、もう1回聞きに行ったりした。

◆今後の課題・発展の方向性

22年度は、特に夏に体調を崩すメンバーが多く、出前講座などは体調管理をしっかりしないといけないと思った。

景気の低迷で、お店屋さんはいつものお仕事に忙しく、また、3月の最後にしようと思っていたことも、震災の影響で無期限延期になってしまった。また、お店屋さんのエコな取組が急に増えてくることも考えられるということなので、「エコマップの完成版」配布は23年度後半になりそうである。

でも、2年目もいろんなことが、新しい学年の学生もそれなりにできたので、今後も22年度までの活動を継続しながら、新しいことにチャレンジしていける自信が、メンバーの中でできてきた。

23年度については、6月の環境月間の取組について既に活動が動き出しており、それが終わったら、エコマップの続きや新しい出前講座の教材作りなどに取組んでいきたい。

◆活動を終えての感想・意見等

3月の大震災は、今後２～５年の資金調達や、事業者との連携において、大きな競合となると思います。ただ、長期的には、いろんな活動が広まったり、学生の意識が社会に開かれていく良い影響をもたらすと思います。何とか、あと「数年のヤマ」をこえて、息の長い活動を有意義に続けていけたらなぁ、と思います。これまで協力してくれていたEPOも23年度から運営団体が変わったり、予算がかなり減ったりしてそうなので、もっと自分たちだけで有意義な活動を地域に提供できるように頑張っていきたいと思いますので、今後ともよろしくお願いします。

活動名	団体名	キララ･カウンセラーズ･クラブ
一般公募における､小グループ活動を中心とした 青少年対象野外教育「クラブ事業」	地域	山口県山陽小野田市
	代表者	代表　永山 康昭
	支援金額	21万円

活動概要

宿泊をともなう体験活動において､野外教育･グループワークの諸方法論を元に､小グループ間の人間関係に注目した自然体験活動。

一般公募にて募集したメンバーを固定､同一メンバーにより短期間の行事を繰り返すことで行事を長期化する「クラブ行事」。

この行事環境の中にて､参加メンバーの社会的性格の助長を期待。

第1回「はじめましての集い」
第2回「海･カヌーのプログラム」
第3回「サイクリング･小旅行計画のプログラム」

◆実施時期

宇部ときわ湖畔ユースホステル
萩青年の家

◆参加人数

1回目行事　12人(小学生)
2回目行事　 9人(小学生)
3回目行事　 7人(小学生)

参加総人員 28名

自然体験活動
「葉っぱでじゃんけん」パーの葉っぱ(かな？)

自転車の乗り方講習
自転車整備も終わり､今から出発です

星座盤を手作りしました

作った星座盤を使って､天体観測
原っぱに寝そべって､観察しました

◆実施に伴う効果

期間的には1～2泊の短期間の行事ではあるが、それを繰り返すことで参加メンバー間に少しずつではあるが交流の幅が広がってきているように思える。
具体的には、毎回グループカウンセラー（リーダー）のレコード（記録）」によると、当初心配していた男女間の会話が甲斐を重ねるごとに増えてきているようである。
行事の長期化に対する効果は、予想通りであると感じる。
また、当初予定していなかったが、行事参加保護者と当グループのコミュニケーションも回を重ねるごとに増えてきた。
顔見知りになったことが大きいが、それによって両者間に信頼関係が築ければと期待している。

◆苦労した点

参加者・大学生ボランティアの募集には苦労した。
事業PRに関して、WEB利用（HP、公的イベント掲載ページ等）は一応の効果があったが、マスコミ等掲載依頼は団体として規模が大きくないためかなかなか受け入れてもらえず困った。幸いにも宇部市広報誌掲載がかなったため、予想以上の問い合わせはいただけたと思う。
大学生募集に関しても、近年大学生はボランティア志向にないらしく、その確保に苦労した。大学関係者にも協力いただき、開催可能人数の確保はできたものの、今後のことを考えるとまだまだ募集努力が必要と思える。

◆今後の課題・発展の方向性

参加者・大学生ボランティアの募集に関しては、現状やれるべきことをやり、実績を積み信用を得ることで、後は口コミによる効果が大であろうと考えている。
事業予算確保に関しては、主となる参加費は今後これ以上の大幅な増額は参加者の立場からも無理があろうと思えるので、数年は何かしらの助成・委託金等の獲得をめざしていかなければと思う。
この事業では、青少年事業の「実施行事」と、それに伴う「ボランティア確保、またその育成」が鍵になるが、その関係は共に比例していくと考えている。
具体的には、「ボランティア数」に対して「実施行事数」が増加するだろうと思うが、「ボランティア」は数ではなく、その実践資質を中心におくべき点は、考えるに容易だ。
実施事業運営とともに、ボランティア育成には充分力を入れて、彼らの援助が充分できる体制を取れる団体になればと思う。

◆活動を終えての感想・意見等

現在、クラブ事業としては引き続き事業継続中である。
その点をふまえても、ある程度の効果は達成できたな、と感じる。
次年度以降も引き続き継続開催をしていきたい。
ある程度の人員確保を期待できるようになった時点で、効果測定を元に、実施アクティビティの見直しも行いたい。

活動名	団体名	山口ひびき少年塾
山口ひびき少年塾 ―ぼくらの/ふるさと探検/タウンウォッチング―	地域	山口県山口市
	代表者	塾長　神代 祥男
	支援金額	18万円

活動概要

「手でおぼえる　目にやきつける　足でさとる　胸にしみこます」(サトウハチローの詩)をモットーにして、子どもたちに社会の仕組みや自然の営みに触れさせながら幅広い知識の習得や人格の育成に役立つよう、毎年8月から翌年1月まで各月1回、学校の休日に自然観察や社会見学を行っている。平成4年に開設し、今年は第19回目を迎えた。

◆実施時期

平成22年8月24日～平成23年1月23日
各月1回、合計6回開催
山口市(5回)、秋芳町(1回)

◆参加人数

第1回	交通安全と史跡見学	29名
第2回	自然と環境の学習	36名
第3回	打楽器の演奏	28名
第4回	社会福祉とボランティア活動	27名
第5回	オーケストラの鑑賞	41名
第6回	国際交流のつどい	40名

参加総人員 201名

第1回　交通安全と史跡見学
秋穂正八幡宮

第2回　自然と環境の学習
仁保川にて　水辺の教室

第3回　打楽器の演奏
秋吉台芸術村にて打楽器を楽しむ

修了式後、全員記念撮影

◆実施に伴う効果

校区を越えた子どもたちの交流の輪が広がり、郷土の歴史、社会の仕組みや自然の営みなど多くのことを学び、また体験することができた。
子どもたちも大変喜び、保護者からも感謝された。

◆苦労した点

参加者の募集について、市内の全小学校34校を訪問し、手作りの募集案内を4年生～6年生全員に配付してもらうようお願いをした。
行事内容については、年初より運営委員会を毎月1回開催して検討し、決定することにしている。

◆今後の課題・発展の方向性

少子化が進み、児童数が減少する一方で、休日はスポーツ少年団の活動や塾通いなどで、当ひびき塾の参加者も一時減少傾向にあったが、ここ1、2年は増加してきた。
子どもたちや保護者の声を聞きながら、更なる研鑽を重ね継続していきたい。

◆活動を終えての感想・意見等

子どもたちの喜ぶ姿や保護者からの感謝の言葉などで苦労も吹っ飛ぶ感じです。

活動名	団体名	Seeds(シーズ)
子どもたちと進める里山復活大作戦	地域	山口県柳井市
	代表者	会長　西本 利治
	支援金額	21万円

活動概要

山林と田地を借り受け、地域内外からボランティアを募り、子どもたちと一緒に荒廃した山林の整備やビオトープの造営を行う。その後、植林や子どもたちの遊び場つくりに着手し、5ヶ年計画で植物や昆虫の野外観察、採集が自由にできる里山を再生する。現在『お山の学校』と命名された里山再生事業地に対する地域の関心を高め交流を促進するため、「里山探検隊」等のイベント事業を実施する。

◆実施時期

2010年4月1日　～　2011年3月31日

「お山の学校」・「旧大里小学校」山口県　柳井市　日積(大里)

◆参加人数

タケノコ交流会(お山の学校)	45名
キノコ交流会(お山の学校)	30名
里山探検隊(旧大里小)	120名
風ん子どんど(旧大里小)	180名
親子木工教室(旧大里小)	52名

参加総人員　427名

「里山探検隊」釣竿できたぞ！

「里山探検隊」ファイヤーナイトに歓声

「里山探検隊」廊下に並んで朝食だ☒

「風ん子どんど」大松明燃ゆ

◆実施に伴う効果

農山村と都市の交流、地域の異世代間の交流等を推進した多様な事業に年間で427名の参加者・協力者を得て、地域の自然や文化を見つめ直す今回の試みに対する地域の理解はさらに深まった。

また里山再生事業の柱である『お山の学校』の認知度も、開催したイベントへの参加者・協力者、そして新聞などのマスコミにもたびたび採りあげられ、それと共に地域内における信用度や親近感も増していった。

助成金の多くは、広報活動に必要な印刷物の財源として活用されたが、助成の効果は、私たちの活動に対して地域の協力と支援がどのくらい得られたかに示されている。しかしそれは、各種イベントの動員数のみで測れるものでは決してない。そこに集った人々が抱くその場に居合わせたことの満足感の総体が、助成の効果である。

◆苦労した点

ボランティアでできることには当然限界があるが、ボランティアでなければできないことも当然多い。ボランティアだから無報酬を前提にして誰にでも何でもお願いできるし、それに応えてくれる人は案外多いものだ。こうして私たちは9年間、何とかここまで同じ旗印の下に活動を継続することができた。その中で一番の苦労は、逆にボランティアだから活動すべき日に皆用事が出来て集まることができないのではないかという不安を常に抱いていなくてはならないことである。

◆今後の課題・発展の方向性

同じメンバーで会を維持していれば当然皆一様に年齢を重ね、職業上での立場も変動し、余暇の取り方も条件も変わってくる。組織として活動してゆくことは人的な新陳代謝が不可欠だが、ボランティア集団の多くがこの問題に直面し、世代交代できないまま滅んでゆく。

そのことは発足当初、充分意識して船出したつもりだ。だから私たちの組織は幾世代かにまたがり、男女比にも心を砕き、途上でいくらかの代謝もあった。しかし、家族との団欒や家の仕事を少々後回しにしながら、人生の限られた時間を費やす訳だから、その無償行為に何をすべきか何をしたいかの一致がない限り、組織は簡単に崩れてしまう。人を留める理由も価値も何も誰も持ち合わせてはいない。

これが組織化したボランティア集団の実態である。

私たちは限りなく自由だが、その分限りなくもろい。言葉にこそしないが、そんな清々しさとはかなさの上に私たちは立っている。

さて、日積地区では平成25年度オープンを目途に『都市農村交流施設』の構想が進んでいる。この施設建設に伴って、私たちが拠点としてきた「旧大里小」の取り壊しが決まった。もちろんこの構想が持ち上がったきっかけの一つに私たちの活動があったことは確かだ。しかし活動の真の意義は理解されず、私たちが望んだ形とは異なる形で拠点は姿を変えようとしている。

なんと悲しい現実だろう。

組織は今、その存在意義の再確認を突き付けられている。旗印(Seeds(シーズ))に再び皆の思いが込められるかどうか、これから正念場を迎える。

◆活動を終えての感想・意見等

１年間応援ありがとうございました。

いただいた助成金はSeeds(シーズ)の思いを込め、有効に使わせてもらいました。

活動の主要行事をご覧いただこうと何度かお誘いしましたが、遠方でもありご都合がつかず、ご一緒できなかったことが残念です。来年度もう一度助成の機会を頂いたあかつきには、是非私どもの活動現場をご視察ください。

活動名	団体名	ドリームスクール実行委員会
	地域	山口県周南市
子どもドリームスクール2010	代表者	実行委員長　中田 智加江
	支援金額	27万円

活動概要

しゅうなん子どもドリームスクール2010 in 近鉄松下

様々な知識を持つ地域の大人が指導者になり、子どもと共にものづくり体験や職業体験を実施し、子どもたちのものづくりや職業に対する好奇心を深め、地域の中で子どもを育てる運動を実践する。

また、空洞化が進む中心商店街の拠点でもある近鉄松下百貨店で実施することで、子どもで賑わう商店街にも寄与する。

◆実施時期

平成22年8月12日(木)から8月17日(火)　10時から15時30分

近鉄松下百貨店6階催会場

◆参加人数

8/12(木):135名
8/13(金):274名
8/14(土):209名
8/15(日):195名
8/16(月):245名
8/17(火):242名

参加総人員(延べ)1,300名

しゅうなん子どもドリームスクール2010
in 近鉄松下　活動の様子(全体風景)

身を乗り出してマジックを学ぶ参加者

大人気のちびっこ調剤薬局(薬剤師体験)

地域の大人から学ぶ子どもたち
(ビーズでアクセサリー作り)

◆実施に伴う効果

近鉄松下百貨店という商店街の拠点施設内の催会場を市民活動グループが使用するのは今回が初のケースであったため、近鉄松下だけでなく、地元商店街や商工会議所、マスコミから注目された。

お盆期間中ということ、幼児から小学生とその親の世代は、百貨店が今までターゲットとしてきた客層とは違うことなど不安要素もあったが、結果的には、予想を上回る参加者が来場した。

参加した子どもや親からは、来年もやってほしい。楽しかったという感想が多く、指導者として活動に係わった地域の方々ともに満足度が高く、継続して実施したいということであった。

また、指導者として登録したい、ボランティアとして参加したいという市民の問い合わせもあり、初めての企画としては、大きな反響があった。

◆苦労した点

予算的には、マツダ財団の支援金に頼る形になったが、近鉄松下百貨店より会場の無償提供及び新聞折込チラシでの周知PRに協力していただき、予算を最小限に抑えることができた。

また、マスコミ（テレビ、新聞）での報道も効果的で、周知度が増し、予想を上回る参加人数となった。（6日間で延べ1,300名参加）

苦労した点は特にないが、今後継続して実施するには、民間（松下百貨店）と市民が更に連携を深める必要があると感じた。

◆今後の課題・発展の方向性

（1）今回の参加者層は、予想以上に年齢が低く、幼児から小学生低学年が中心であったため、家族単位での参加が多かった。今後の課題としては、体験プログラムの内容を幼児でもできるものや親子で体験できるものを検討する必要がある

（2）運営の安定
今回は、材料費のみを実費徴収する方式としたが、今後は、運営費確保のため、各講座受講料を徴収するなど、継続的に実施できるような資金計画が課題である。

（3）今回は近鉄松下百貨店を会場として実施したが、来年度は、商店街内の空き店舗なども活用し、商店街全体が子どものものづくり・職業体験会場となるように発展させたい。

◆活動を終えての感想・意見等

今回マツダ財団の支援により、初めて商店街内でドリームスクールを実施することができ、感謝しています。ドリームスクールは、来年度、10年目という節目を迎えます。

今までは実施会場を市民館等の公共施設を借りて実施していたが、今回の試みで、商店街の中でも、楽しい企画をすれば、多くの子どもが参加することが実証された。

今後は、青少年の健全育成と地域の大きな課題でもある商店街の賑わい創出の両方に寄与できる市民活動へステップアップしていきたい。

活 動 名	団 体 名	日本宇宙少年団　周南分団
	地　　域	山口県光市
ものづくり科学教室	代 表 者	分団長　志水 慶一
	支援金額	10万円

活動概要

毎月1回　年間12回の活動を行いました。毎回3時間、工作、実験、時には見学などが主体の”楽しく作って学ぶ”を基本方針とする体験型活動です。 子供達と父兄・スタッフが一緒になっての活動です。参加者は、各自、自分の工具などを持参し、講師の指導に従い工作、実験を行います。毎月、違った新しいテーマですのでスタッフも生き生き、子供達も楽しい工作となりました。工作・実験の前には、安全に関する注意、工作・実験に関する科学的な説明なども行います。創造力、向上心、協調性、思考力などを育成することが出来たものと考えております。

◆実施時期

毎月1回　原則第3日曜日　13時～16時

定例会場：周南市久米公民館（左記以外‥中国電力柳井発電所、徳山高専）

◆参加人数

総数約600名

（子供約25名　父兄15名　スタッフ約10名　合計50名

50名×　12回＝　総数　約600名）

参加総人員 600名

科学で遊ぼう（カルメ焼き）

色んなシャボン玉をつくろう
（シャボン玉でお手玉）

電気について学ぼう
（中国電力柳井発電所見学）

気体の不思議と熱気球の製作

◆実施に伴う効果

・周南地域の他の団体との連携が進んだ。他の団体として、中国電力、徳山高専、おもちゃ病院など

・ラジオ、タウン誌、雑誌、新聞などでの紹介の機会が得られた。
ラジオ：しゅうなんFM　、タウン誌：たうんぽっぽ　　子供向け雑誌：子供の科学
新聞：　日刊新周南

◆苦労した点

一年目（2009年）は、いわゆる若葉マークで、全て未経験であり、予算、外部PR、参加者募集、活動の方法など、いずれも手探りで進めました。スタッフ（仲間）が沢山いたこと、また皆さんが熱心であったことが活動推進の原動力になりました。
加えて、科学技術振興機構から助成が得られたこと、外部団体の協力が得られたことが、我々の活動を大きく後押ししてくれたものと感謝いたしております。
活動PRと協力要請、参加者募集のため、小学校の校長へのお願い、企業・高専への活動紹介、ホームページ作成、イベントへの協賛など多く行いました。また、当方の活動を社会教育活動として認知してもらうため、周南市、光市などの行政の関連部門への働きかけも行いました。

二年目（2010年）は、一年目に苦労した点の多くに関しては、様子も分かり大きな苦労はありませんでした。ただ、毎回新しいテーマで活動をすることを方針としている為、二年目は、1年目以上にテーマづくりには苦労しました。新年度の半年以上前から準備し、やっと1年分のテーマを設定することが出来ました。来年度も、生き生き活動するためには、新しいテーマを前提にしたいとおもいますが、さらに苦労しそうです。

◆今後の課題・発展の方向性

活動内容をさらに充実させ１年でも長く継続させたいと思っています。そのためには、ボランティアリーダーが重要です。現在、12名のボランティアリーダーに参画頂いていますが、60代半ば以上の方が多く、数年先の活動は厳しいものがあります。一人でも多くのボランティアリーダーの参画が待ち望まれます。

1年でも長く継続することが必要条件ですが、
①子供達に年間目標をもたせての活動
②人数が増えてきていますので、低学年対象、高学年対象の教室
③単発にはなりますが色んな学校（養護学校など）、地域への出前教室
なども、現教室の実績を積み上げながら考えて行きたいと思います。

◆活動を終えての感想・意見等

楽しく、自分自身も勉強出来た一年でした。また色んに人に助けられ、交流できたのも良かったと思います。

何人かは卒業して行き寂しい思いがしますが、新しい人の参加申し込みが沢山あり、さあまた一年頑張ろうと言う気持ちになっています。

活動名	団体名	国際交流ひらかわの風の会
外国人留学生と平川地域における 青少年健全国際交流活動	地域	山口県山口市
	代表者	会長　中村 幸士郎
	支援金額	30万円

活動概要

私たちは、地域と留学生家族のパイプ役を担うことを目的に、マツダ財団の支援のお陰で、様々な活動を通して、生活に密着した異文化理解や国際理解を相互に深めることや、地域の安心・安全にも繋げていくなど、住みやすい地域づくりを推進することができた。

主な活動としては、平川地区民全体との交流として、地域の恒例行事（4月平川地区民運動会、8月盆踊り、11月平川まつりの出店）による参加促進し、留学生と地域との交流促進を図った。また、新たな活動として、「留学生とのテレフォンパートナー制度」による住民との交流を図る一方で、留学生と地域の住民を対象に、「伝統的な農耕文化体験交流事業」では、揉み蒔きからしめ縄づくりまでを体験や、東大寺再建の俊乗房重源上人の史跡めぐりでのそば打ち体験、石風呂体験は、体験を通じて、日本文化の誇りや価値を見直すことなど、各方面から高い評価をいただいた。留学生などを対象にした自転車交通安全教室も実施し、地域の安心安全にも貢献している。

◆実施時期
通年
山口市平川地区ほか

◆参加人数
15人～100人

参加総人員延べ 1,200名

平川地区は、外国留学生とその家族や外国人教員らが居住する多文化共生地域

「留学生との米や野菜作りによる地域交流」
日本の伝統的な農耕文化体験事業を実施

「しめ縄づくりと餅つき体験」地域の農家と連携して、伝統的な注連縄づくりと餅つきの体験会を実施

「茶道体験と留学生地域送別交流会」
留学生家族ら69名が参加し、抹茶体験会

◆実施に伴う効果

・留学生家族から、平川地域が本当の意味で住みやすさを実感できるようになったとの声が多数あった。
・地域の人たちと留学生家族が、スーパーやコンビニなどで気軽に声掛けができる情景を見ることができるようになった。留学生家族が見知らない地域の人たちにも話しかけるようになってきた。
・留学生の自転車のマナーがよくなってきた。自転車事故が減少してきている。
・参加した日本人学生から、日本文化の魅力や奥の深さを知るキッカケとなり、日本人としての誇りを持つようになったと感想レポートに多数あった。海外留学や青年海外協力隊に参加した学生、また、それを目指そうとする学生も出てきた。
・山口大学留学生支援室から、新規留学生生活説明会（年2回）のカリキュラムに、風の会の活動説明タイムをいただけるようになったことで、活動参加者が飛躍的に増加するなど、大学側の理解度が深まった。
・多文化共生地域として、モデル的なケースとなりつつあることから、山口大学副学長（工学部）から、工学部のある宇部市に、当会の活動を紹介し、第2、第3の風の会をつくりたいと要望されている。
・地域住民に、当会の活動が広報紙等で紹介されるなど、理解が深まってきたことで、当会の諸行事に参加したり、積極的なお手伝いをいただけるようになってきた。
・山口大学本部から、大学の推進する地域連携・国際戦略の意見交換の場が設定されるようになった。当会メンバーの意見が少しづつ反映されるようになったきた。
・イスラム系留学生家族の日本での初めての出産のサポート（医師との医療通訳、妊婦の送迎等）を、当会スタッフ全員で連携し寄与した。留学生から安心安全をイメージされ、絶大な信頼をいただくことができた。

◆苦労した点

・参加留学生が固定化する傾向にある。
・交換留学生等は、1年で帰国するので、更に継続し深める必要を感じている。新年度は工夫を加えて、新たな展開を図る考えている。
・通年で事業を展開するにあたり、東アジア留学生たちは金銭面で苦しいため、参加負担金を安価にしてあげたいが、当会スタッフ（会費とは別）の負担が大きくなっている。マツダ財団の支援は大きい。参加しやすくさせるためにも、学生たちの負担を軽減したい。

◆今後の課題・発展の方向性

・平川コミュニティ推進協議会という組織は、自治連合会やPTAなど地区内23団体で構成され、それぞれの団体の長が協議会会員となって、平川地区の町づくりや地域振興を進める活動をする団体ですが、外国人が300人以上居住している同地区において、多文化共生社会は避けて通れない中で、山口大学との連携が益々重要になってきている。その一員として参画したいのだが、同協議会役員の理解が薄い状態である。
・地域でできる留学生家族の生活支援対策や育児支援対策等について、行政・地域・大学の役割などを同じ土俵で協議推進していかなければならないと感じている。今後、当会の役割として、留学生たちを交えて、課題を整理し、関係機関等へ提言していけるように取り組みたい。
・帰国留学生とのネットワークを構築し、グローバルに、末永く国際理解や国際交流が図れるようにしていくことが大事であり、本音の交流を活発化したい。インターネットの活用やスタディ・ツアーも計画する。
・地域における青少年（大学生、地域住民）に、国際理解を一層推進し、留学生との交流の中心的な役割を担わせ、多文化共生のモデル的な地域にしてきたい。そのために、新年度から風の会学生部会（案）を設け、養成していきたい。

◆活動を終えての感想・意見等

・山口市内の大学、留学生、地域住民、関係機関などから、風の会の活動が浸透したことで、活動に理解の輪が広がり知名度が高まったことで、他団体からの誘いや交流が活発化し、活動にも弾力的な展開を図ることができた。
・これらの諸活動に参加した留学生たちから、帰国前に、多くの思い出と日本・日本人に対する意識の変化（好意的）があるとともに、感謝される。帰国後、親族や同僚、後輩たちに日本での経験を伝えたいと、涙を流してくれたことに感動しました。参加した地域住民からも同様に感謝されるなど、地域における国際交流の重要性をあらためて認識しました。
・マツダ財団の支援のお陰で、活動も飛躍的な展開ができたことに感謝申し上げます。

活動名	団体名	防府市読書グループ連絡協議会
幼児、小学生読み聞かせ活動推進支援事業	地域	山口県防府市
	代表者	会長　大田 和子
	支援金額	12万円

活動概要

・平成22年度は、国民読書年にあたる。これを機に絵本の読み聞かせ方、紙芝居の演じ方等の研修会を開催する。
・子どもにとって魅力的なおはなし会とは、防府図書館での読み聞かせ活動、幼稚園、保育園、小学校、公民館等の読み聞かせの場を通じて、つねに検討し、経験を重ねることによる自己啓発の場とする。
・絵本の読み聞かせのプログラムつくりを豊かにするためのパネルシアター、エプロンシアター、ペープサートなどの作成事業の推進。
・子ども読書まつりに参加する。

◆実施時期
（西暦）2010年4月1日～2011年3月31日
場所　防府図書館及び、防府市内各小学校、幼稚園、公民館
◆参加人数
子ども読書まつり（幼稚園、保育園、小学生）400名、（大人）200名
幼稚園、小学校読み聞かせ活動　1,000人
パネルシアター等作成事業　200人

参加総人員　1,800名

幼稚園で紙芝居に見入る園児

児童文学講演会　横山真佐子氏（こどもの広場主宰）
「読んでもらう」から「ひとりよみ」へ

エプロンシアターの作品を子ども読書まつり会場に
展示　大人気であった

防府図書館まつり　わっしょい広場にて
パネルシアター舞台に絵人形を貼り付けて…

◆実施に伴う効果

1. 講演会の開催は、子ども読書推進のための研修の場として、読み聞かせ活動に関心を持つ人に感謝されている。
2. パネルシアター、エプロンシアター、ペープサートは、購入するには資料費がかかるし、作成するには時間的余裕がないということで、幼稚園、保育園、小学校などの読み聞かせ活動に利用度が増えている。
3. マツダ財団の助成金により、乳幼児から小学生まで年齢に応じて上演できるように作品数を揃えることができた。
4. 資料点数が増えると、作品選択の幅が広がり、貸し出し数も増える。
5. マツダ財団助成金により、貸し出し資料点数の基礎資料が整ったが、今後とも資料の増えるのを楽しみながら作成活動を継続していきたい。

◆苦労した点

1. パネルシアター等、作成活動に参加する人は、子育て、孫の守を終えた年代の人が多く、若い人に作成に参加して、若い人の考えを投影して欲しいと思うが、実現が難しい。
2. 子ども読書推進の必要性は叫ばれている。幼稚園、保育園、小学校での読書推進に取り組みがなかなか進まないでいる。小学校、幼稚園、保育園に読み聞かせ活動に行くことが必要であり、要望はあっても、各幼、保、小とも、カリキュラムに追われ、読み聞かせ活動の時間設定が難しい現状がある。
3. ボランティア活動をするのに資金も自分で用意しなくてはというところがある。研修活動、実践活動をすると資金調達までする時間的余裕がないということもある。

◆今後の課題・発展の方向性

1. 今後は、作成したパネルシアター、エプロンシアター、ペープサートなどの使い方等の研修活動を行い、活用していただくことに力点をもっていきたいと思う。
2. 作成作品については、防府市読書グループ連絡協議会として、広報活動を積極的に行い、周知のための努力が必要となる。
3. 読み聞かせプログラム作成の検討
4. 子どもは、早くから保育園にいく。保育園、幼稚園、小学校での絵本読み聞かせがもっと推進される必要がある。読み聞かせグループが積極的に参加することが求められる。

◆活動を終えての感想・意見等

マツダ財団のご支援で防府市内の親子、読み聞かせ活動に関係する人たちに、講演会を聞いていただく機会ができました。パネルシアター等は、マツダ財団等の助成金によって作品を作成することができました。防府図書館に寄贈することにより貸し出しができます。防府市読書グループ連絡協議会としては、マツダ財団の助成金でできていることをPRしなくてはと思います。

活動名	団体名	特定非営利活動法人 子どもとともに山口県の文化を育てる会
香月泰男生誕１００年記念 小･中･高校生のための教材制作～わたしのシベリア～	地域	山口県山口市
	代表者	理事長･実行委員会長　山田 宏
	支援金額	30万円

活動概要

当会NPO設立10周年企画事業

山口県で第66回国民体育大会が開催される2011年は､｢シベリア･シリーズ｣で知られる洋画家､香月泰男の生誕100年にあたります。

香月を輩出した山口県では各地の美術館で､記念展覧会などの行事が開催準備中です｡その記念年に､厳しい戦争体験に基づき香月が自らの芸術を通して表現した､平和への強いメッセージを永く後世に継承するためにDVDを制作しました。

◆実施時期

(西暦)2010年4月1日～2011年　3月21日

山口県内全小･中･高等学校､特別支援学校など　653校

◆参加人数

◇対象者　山口県内全小･中･高等学校､及び山口県内特別支援学校児童生徒など

･市町校－516校　･県立中高一貫校－2校　･県立高校－64校

･特別支援学校－16校　･市立高校－１校　･私立中高等学校－35校

･国立学校－5校　･山口県教育庁－14箇所　＜全配布数　653箇所＞

香月家取材

長門市立明倫小学校取材

長門市立明倫小学校取材

DVD～わたしのシベリア～視聴会
於　山口市立中央小学校

◆基本的な構成

香月泰男の戦争虜囚体験と復員後の絵画化、及びそのテーマを分析して、1つのストーリーにまとめて映像化する。そのストーリーに、原画、イメージ画、記録写真、記録映像等を効果的に組み合わせ、音楽・ナレーションを入れ、約20分のドキュメンタリー作品とする。

・戦争と抑留生活の体験(絵画とイメージ映像)
・香月泰男のシベリアシリーズの作品
・家族に宛てた絵手紙
・山口県長門市三隅町の香月家と婦美子夫人の話
・サンジュアン(豆の木)に込まれた香月の思いなど

※イメージ画制作は、山口大学教育学部美術教室が担当する。その為のワークショップを開催。

◆実施に伴う効果

本会は『Arts are Basic』(芸術・文化は教育の基礎)を原点に、質の高い芸術や文化に接する機会を創り子どもとともに学び、心豊かな生活をすることを目的に事業を継続している。この度、香月泰男が芸術を通して表現した「戦争と平和～命～」などについて考える機会とした。人間性の明と暗、家族愛と絆など「生きる」ということをテーマに、学校教育現場において子ども達とともに学ぶ機会とし、美術館で香月芸術に触れることで、地球上の全ての命を大切にする心根を育成できると確信する。

◆今後の課題・発展の方向性

本会では、子ども達の読書離れを危惧し、2003年より「朗読と音楽の集い」～心に響きあうことば～実行委員会(実行委員長-磯野恭子)を設立し、何百年も続いた名文、美しい日本語や詩、及び募集した作文などを朗読と音楽を組み合わせた事業を県内各所で継続している。

また、第21回国民文化祭山口2006に際し、山口県立美術館では「雪舟展」が開催されるにあたり、同実行委員会で、雪舟の生い立ちや絵が生まれた背景、日本一の名声をとった雪舟の絵をドキュメンタリータッチで描いた作品も加えたDVDを制作し、絵と日本語のハーモニーを県内三箇所で国文祭プレイベントとし実施した。子ども達から大きな反響があり、引き続き子ども達のために
山口県出身芸術家たちのドキュメンタリー制作を計画。

◆活動を終えての感想・意見等

山口県教育委員会では、平成23年度から「地域や伝統、文化を踏まえた教育」充実のための授業が設けられ、その第一回目が香月泰男です。その資料として同DVD～わたしのシベリア～が活用されることになりました。それに先立ち、去る2月15日に山口市立中央小学校において授業の一環とする『DVD～わたしのシベリア～試聴会』が開催されました。

活動名	団体名	古泉城ニコマル文庫
「古泉城彦六物語(改題:「これはいしくのひこさん」)」紙芝居プロジェクト	地域	山口県萩市
	代表者	主宰　伊藤 里絵
	支援金額	20万円

活動概要

古泉城ニコマル文庫の活動拠点となっている古戦場地区に伝わる農民石工「彦六」さんを題材に創作積み上げばなしの紙芝居を完成させた。製作に当たっては紙芝居作家やべみつのりさんの全面的な協力をいただいた。やべみつのりさんを招聘して講演会と紙芝居の製作指導を受けるにとどまらず、作画も担っていただいた。そのため、出版に耐え得るレベルの紙芝居に仕上がった。また、来日したアフガニスタンの子どもたちに東京で紙芝居を手渡すことができた。
その際にはやべみつのりさんも同席され、熱いメッセージを子どもたちに送っていただいた。

紙芝居の第1作が仕上がったことにより、講演などに招かれた際にこの紙芝居を上演し、地域の歴史や文化を掘り起こすだけでなく、手づくりの紙芝居が異文化理解や環境理解などを進める教材としての可能性を持っていることを伝えることが出来た。

当初計画した活動の内容に多少の見直しがあったものの、概ねプロジェクトの趣旨に沿った活動を行うことが出来たのではないか。

◆実施時期
2010年4月～2011年3月　山口県萩市、東京都新宿区、静岡県浜松市

◆参加人数
児童・青少年:約80名
児童の保護者:約20人
学校・図書館関係者及びボランティア:約30人
寺院に集われた方(高齢者が大半):約100人　　参加総人員(延べ)　約230名

アフガニスタンの子どもたちが贈呈した
紙芝居を持って、東京・新宿にて

贈呈した紙芝居を手にして

「これはいしくのひこさん」の上演
静岡県浜松市　龍谷寺にて

明木小学校での講演会の様子

◆実施に伴う効果

1. 紙芝居作家やべみつのり氏を招いた講演会や紙芝居製作指導がきっかけで、文庫主宰者の伊藤里絵を講師にして萩市立明木図書館で子ども向けの「かみしばいづくり」講座が始まった。(2011年5月より)
2. 阿武川源流域の歴史や言い伝えを題材にした紙芝居の第1作が製作できたことにより、第2作目の構想を固めることが出来た。2011年～12年度には「川上平助権太物語」(仮題)を予定している。
3. 地域の身近な題材を基にした紙芝居が、国際交流や異文化理解のためのツールとして有効であることを提示できたのではないだろうか。

◆苦労した点

1. 地域に伝わる「偉人」として戦前に掘り起こされ顕彰されており、話の内容が当時の政治的な影響を強く受けていると考えている。伝わる話をそのまま紙芝居にすると異なるメッセージを出してしまうため、「創作積み上げ紙芝居」にすることにより、地域を流域で捉え、動物や生物を登場させ、いのちの連鎖と循環を考えることの大切さを織り込んだ紙芝居となった。
2. パシュトゥン語への翻訳に時間的な余裕がなかったため、専門家によるチェックができなかった。(その旨は、受け取ったアフガニスタン人(NGO図書館担当職員)には伝えている。)
3. 出版するための予算が用意できていないため、まだ出版のメドがたっていない(2011年6月時点)

◆今後の課題・発展の方向性

1. 製作した紙芝居を出版・普及するための財源づくりが大きな課題である。
2. 第2作として、やはり阿武川流域に生きた百姓を題材に構想を練り始めている。
3. 地域の社会福祉協議会や老人施設、小中学校、図書館などと連携しながら、高齢者の生きた歴史を聞き出して、「人生紙芝居」の製作を進める計画を練っている。人生紙芝居の製作や上演を通じて異世代交流の推進や地域に暮らした人間の歴史を地域の図書館に残していくことを提案していく。

◆活動を終えての感想・意見等

1. 1年限りの助成ではいろいろ難しい面がある。金額は大きくなくても、せめて3年ぐらいの期間、継続してサポートしていただけると有難い。
2. 地方自治体が行政主導で下請けNPOを設立している現状があり、その状況下で行政機関又はその影響を受けている団体などの推薦を申請時に求めることは、ますますNPOなどの市民活動団体を行政の下請け的位置に追い込むことになりかねない。貴財団においては、民間の助成財団として行政と距離を置き、独自の方針で助成をしていただけることを期待している。

活動名	団体名	自閉症児を育てるママたちの会　ママかん
自閉症・発達障害の子どもをサポートする ボランティアのためのハンドブック及びDVD作成	地域	山口県山口市
	代表者	代表　新田 圭子
	支援金額	50万円

活動概要

自閉症や発達障害の子どもをサポートするボランティア育成を主な目的として活動した。
活動概要は、①自閉症の母親たちのための交流カフェの企画・運営・託児にかかわるボランティアのコーディネートと育成、②自閉症や発達障害の子どもにかかわるボランティアのためのハンドブック作成と啓発DVDの作成を行う。

◆実施時期
平成22年4月12日（日）世界自閉症デーイベント　カフェ活動：山口県立大学
平成22年4月～平成23年2月（月1回）ママかんフリーカフェ：山口県立大学地域交流スペースYucca
平成22年7月11日（日）あくしゅの会余暇くらぶくれよん夏祭り　ママかんカフェ出展：ひらきの里
平成22年10月17日　自閉症研修会にてカフェ活動：山口県立大学看護棟
平成22年11月23日　ボランティア学習会・交流会：岡村邸はりはり
平成22年12月　ボランティアとの交流「ありがとうの会」：山口市マーレ
平成22年12月～平成23年2月　ハンドブック企画・編集会議及び執筆作業
平成23年3月　ハンドブック校正作業、反省会ミーティング

◆参加人数
学生ボランティア166名、イベント・カフェ参加者　443名
専門家ボランティア　37名

参加総人員　646名

月一回のママかんフリーカフェの託児の様子
（学生ボランティアが大活躍です）

月一回のママかんフリーカフェの様子
母親同士の素敵な交流が生まれるように…

ママかんスタッフと子ども、そして活動を支えてくれる
専門家とボランティアのみんなと

自閉症支援にかかわるボランティア、専門家、
そして、家族のメッセージ

◆実施に伴う効果

① ボランティア力を活用したことによるママかんフリーカフェの継続化と発展

・専門家ボランティアと学生ボランティアの力を活用したことで、定期的に障害児，発達が気になる子どもを育てる母親同士が気軽に情報交換したり，専門家や先輩の母親に相談したりできるカフェを運営することができた。

・知的障害児通園施設，児童デイサービス等，幼稚園・保育所，学校，その他医療現場や児童相談所等の相談機関，保健センターなどと連携し，インフォーマルサービスとしての母親支援事業として機能させることができた。

② 出会いの場の創造

母親同士、母親とボランティア、ボランティアと子ども等々の出会いの場を創造することができた。

③ 成果物の作成とその活用の効果

ママかんは平成15年8月から自閉症を育てる母親が専門家と協力しながら親同士の交流や学習の機会を提供したり、ボランティア育成を継続して行っている。6年間の継続した活動によって、山口市を中心に自閉症の理解と支援の輪を確実に拡げているが、今回、マツダ財団から助成金を受け、これまでの活動で得た地域のニーズ、障害児・者福祉に必要不可欠なボランティア育成に着目し、成果物を作成できたことは大きな成果だったと考える。DVDは4分間で構成されており、今後、自閉症支援やボランティア育成にかかわるイベントや研修会、学習会で有効に活用できる。すでに、ボランティアのための学習会等で2回、当会と連携している大学教員の講演会で2回活用した。また、ハンドブック（冊子）は、B5サイズ32ページで構成されている、当初の予定であったボランティアを対象とした「ボランティア育成」の目的にとどまらず、自閉症児を育てる母親にとって参考となる情報を入れることとした。したがって、「自閉症児を育てる家族の子育て支援」のツールとしても活用できると思われる。

このハンドブック（冊子）は、全国の発達障害者センターと山口県の関係機関に3冊ずつ郵送・配布した。また、ママかんカフェの参加者や活動に参加したボランティアに配布、今後も配布する予定である。この冊子を教育・福祉・医療等の専門家の研修会で紹介したところ、「分けてほしい」という声もあがった。平成23年4月 20 日にママかんスタッフを中心に話し合った結果、以下のような方針で、東日本大震災の義援金活動に参加することとした。

◆苦労した点

1．ボランティアコーディネート

・運営にかかわる学生ボランティアが継続して活動・事業にかかわってもらうための工夫が必要であった。

2．予算及び専門的技術の欠如

・ボランティアのためのハンドブックの企画においては、多くの情報を掲載したかったのだが、予算にこともあり、ミニ冊子を作成した。DVDの作成への意欲は高かったが、編集ができるスタッフがいなかったため、業者に見積もると30万 円かかることがわかり、断念した。したがって、これまでの写真を構成してバックに音楽を流し、約4分間のDVD作成を行なった。

3．専門機関との連携と課題と活動の普及方法

・保健センターとの連携は極めて重要だと考えていたが、行政機関との連携の難しさを感じた。このような取り組みを普及・啓発していくためには、保健センター等の行政機関や関係機関と手を取り合っていく必要がある。

◆今後の課題・発展の方向性

今後の課題として，創設した母親支援事業（ママかんフリーカフェ）を継続させつつ，地域を基盤とした顔と顔が見える関係の中で地域のフォーマルな支援機関との連携を強化し，地域における母親支援システムの構築に向けて実践を継続することである。そして，地域における母親同士のつながりだけなく，母親とボランティア，母親と専門家等，母親が人や社会とかかわりながら子育てができる環境としての地域社会を創造していきたいと考える。また、自閉症、発達障害の発見前の支援体制の整備は十分とはいえない。ここに着目しつつ、ママかんスタッフの経験や人間性を活かしたピア的な支援としての「ママかんフリーカフェ」を運営できるよう、今後も大学研究室と連携して、活動を継続しつつ、地域課題の解決にチャレンジしていきたい。

◆活動を終えての感想・意見等

＜ママかんスタッフ8名一同から＞

今回、マツダ財団から資金をいただき、私たちがイメージしていた「ボランティアのためのハンドブック」が完成したことにスタッフ全員で喜んでいます。

また、母親同士の出会いや交流が生まれるためのカフェ運営を、自閉症を育てる母親だけでなく、専門家ボランティア、学生ボランティアの力が活用できたことで、このようなカフェを運営するための一つの方法が生まれたように思います。助成金を満額いただけたこと、本当に感謝しています。これからも、自閉症支援にかかわってくださるボランティアとの出会いを大切にしながら、私たち自身も社会貢献できるような取り組みを行なっていくことができたらと思います。

＜山口県立大学社会福祉学部 藤田研究室より＞

マツダ財団から助成金をいただいたことでハンドブック（冊子）の編集にかかわらせていただき、ママかんと共にこれまで行なってきた活動の成果が一つの形になったことはとても嬉しく思いました。今後も、ママかんとの共同実践を行いながら、この活動を継続させ、地域の中で、「ママかんカフェ」が定着していくように自閉症児を育てる母親と専門家とボランティアが手を取り合いながら素敵な取り組みができるよう大学研究室として協力していきたいと思います。特に、ボランティア育成には力を注ぎ、多くの学生たちが自閉症支援にかかわることができるようコーディネートしていきたいと思います。ありがとうございました。

第26回（2010年度）マツダ財団市民活動支援 贈呈式

《広島県》

《山口県》

《特定非営利活動法人 おのみち寺子屋》

《ふるさと宮園ビオトープの会》

《くれ絵本カーニバル実行委員会》

《晴海町･青壮会》

《呉子ども祭実行委員会》

《B&Cタッチ･ステーションの会》

《ひまわり》

《高校生環境ネットワーク広島》

《伴南学区安全対策連絡協議会》

《広島市立大学都市ギャラリープロジェクトチーム》

《よしじま職人工房》

《カモミール～ラマシカ～》

《創作合唱オペラ「いのうもののけ」公演実行委員会》

《ええじゃん(Asian)》

《スイゲンゼニタナゴを守る市民の会》

《こどもの広場実行委員会》

《もりメイト倶楽部Hiroshima》

《Global Bridge》

《ほんわかプロジェクト応援団》

《特定非営利活動法人 ワーカーズコープ広島支部》

《大学環境ネットワーク協議会》

《キララ･カウンセラーズ･クラブ》

《山口ひびき少年塾》

《Seeds（シーズ）》

《ドリームスクール実行委員会》

《日本宇宙少年団　周南分団》

《国際交流ひらかわの風の会》

《防府市読書グループ連絡協議会》

特定非営利活動法人
《子どもとともに山口県の文化を育てる会》

《古泉城ニコマル文庫》

《自閉症児を育てるママたちの会　ママかん》

マツダ財団青少年健全育成市民活動支援

第25回（2009年度）

活動名	団体名	地域
犯罪被害防止教室開催	広島県福山北警察署管内少年補導協助員連絡協議会	広島県福山市
こどもの広場	こどもの広場実行委員会	広島県広島市
東区障害児のためのサマースクール	東区障害児のためのサマースクール	広島県広島市
文化伝承邦楽「箏」の伝承指導	邦楽グループ　城友会	広島県豊田郡
夢山コンサート～羽和泉　竹の楽団～	羽和泉みどりの少年団	広島県三原市
学童工作教室の新展開と環境美化及び、地域資源を活かしたふれあいイベントによる地域社会の絆づくり	晴海町・青壮会	広島県呉市
小学生が楽しく実習して理科好きになる「地域と大学とのコラボによる竹炭・竹酢液・竹塩作り体験」	大道山竹炭工房	広島県東広島市
学生による各種環境教育活動	大学環境ネットワーク協議会	広島県広島市
子供達に文化の継承とボランティア演奏	こども琴クラブ	広島県東広島市
ART PARTY	ART PARTY実行委員会	広島県広島市
第12回猿猴川河童まつり	段原地区町づくり協議会(猿猴川河童まつり実行委員会)	広島県広島市
加計小夢配達人プロジェクト推進事業巨大万華鏡づくり	加計小夢配達人プロジェクト安芸太田実行委員会	広島県山県郡
北広島町夢配達人プロジェクト推進事業(植物写真集作成)	北広島町夢配達人プロジェクト実行委員会	広島県山県郡
認知症予防の「脳と体の健康ルーム(ＮＰＯ運営)」の展開と若者サポーターの参加と育成プログラム	ＮＰＯ法人うたしの会	広島県広島市
障害児の余暇活動と支援	府中町手をつなぐ親の会	広島県安芸郡
歌による子どもたちの表現活動の支援　子ども・子育て情報紙の発行による地域の中での子育てを支援	こどもステーション	広島県福山市
都市ギャラリープロジェクト	広島市立大学都市ギャラリープロジェクトチーム	広島県広島市
エコ工作教室	広島環境サポーターネットワーク	広島県広島市
「蘇れ　母なる海　松永湾　パート3　みんなで考える環境保護」	環境市民ネット松永	広島県福山市
田んぼの楽校	広島市ネイチャーゲームの会	広島県廿日市市
西区ミニ障害児子どもまつり	こすもすの会	広島県広島市
親子わくわく科学教室	特定非営利活動法人三次科学技術教育協会	広島県三次市
第34回全日本ろう社会人軟式野球選手権大会	第34回全日本ろう社会人軟式野球選手権大会実行委員会	広島県広島市
友楽タイムおいでよわせだっ子	早稲田学区青少年健全育成連絡協議会	広島県広島市
みて！みて！平和のでっかい絵	社団法人 広島青年会議所	広島県広島市
地域のお宝大発表会ｉｎ田町商店街	萩子ども情報センター協議会	山口県萩市
非行少年の更生と福祉に関する諸活動	山口少年友の会	山口県山口市
わくわく土曜塾	長門市中央公民館事業企画運営委員会「わくわく土曜塾」担当	山口県長門市
美祢市子連ジュニアリーダーズクラブ於福支部事業	美祢市子連ジュニアリーダーズクラブ於福支部	山口県美祢市
「療育に関する事業(キラキラ☆キッズ)」「余暇支援及び生活支援に関する事業(キラキラ☆クラブ)」	ＮＰＯ法人シンフォニーネット	山口県下関市
わくわく科学ＳＵＭＭＥＲフェスティバル2009	岩国科学をたのしむ会	山口県岩国市
ホタルの夕べ	富海をホタルの里にする会	山口県防府市
合　計　　32件　　800万円		

第24回（2008年度）

活動名	団体名	地域
レクリエーション及び野外活動に関する技術の普及並びに指導者・ボランティアの育成、技術向上を目的とした研修講座	施設ボランティア野外活動研究サークル「くわがた」	広島県広島市
こどもの広場	こどもの広場実行委員会	広島県広島市
東小学校通学路清掃・環境まつり・農業体験	府中町府中東小学校区公衆衛生推進協議会	広島県安芸郡
おいもでつなぎ広げる地域の輪	おいもを愛する会	広島県呉市
文化伝承「邦楽　箏」児童ふれあいサロン	邦楽グループ　城友会	広島県豊田郡
ミニ障害児子どもまつり	こすもすの会	広島県広島市
エコ工作教室	広島環境サポーターネットワーク	広島県広島市
学童工作教室の拡大と環境美化及び、地域資源を活かしたふれあいイベントによる地域社会の絆づくり	晴海町・青壮会	広島県呉市
子どもたちの『心の居場所』-地域や社会全体で支えるために-	NPO法人　ひろしまチャイルドライン子どもステーション	広島県広島市
沙羅の森チャリティコンサート	特定非営利活動法人.朋　広島	広島県広島市
ART PARTY	ART PARTY実行委員会	広島県広島市
寺子屋子ども野外体験塾	世羅町子ども会育成連合会	広島県世羅郡
ベビー＆チャイルドサポートセンターの基盤事業～子どもたちの心の声に耳を傾けよう～	特定非営利活動法人　日本タッチ・コミュニケーション協会	広島県呉市
子供達による「竹炭作りから販売」までの実習体験	大道山竹炭工房	広島県東広島市
重度・重複障害児スポーツ・レクリエーション活動教室	重度・重複障害児スポ・レク活動サークル「はなまるキッズ」支援チーム	広島県広島市
『蘇れ　母なる海　松永湾　パート２　広げよう環境保護の輪』	環境市民ネットまつなが	広島県福山市
峰田小夢配達人プロジェクト推進事業(絵本作成)	峰田小夢配達人プロジェクト庄原市実行委員会	広島県庄原市
神石高原町を舞台にした絵本作り	夢配達人プロジェクト神石高原町実行委員会	広島県神石郡
安地区まちづくりプランプロジェクトおとなりさん	安地区まちづくりプランプロジェクト「おとなりさん」	広島県広島市
ダウン症青少年ソーシャルスキルアップ支援事業～カカオチームのコーヒーサービス研修と実践～	(財)日本ダウン症協会広島支部　えんぜるふぃっしゅ	広島県広島市
あふれる自然の中での子供たちの体験、経験を通じ親子、家族同士の連帯を深める会	Men's なかよし	広島県広島市
ものづくり体験・科学教室「なんでもかがく塾」	日本宇宙少年団ミザール分団	山口県周南市
ふるさとの“歴史と食”の伝承	遊巣の里	山口県岩国市
神原校区ふるさと歴史マップ作成事業	神原校区子ども委員会	山口県宇部市
わくわく土曜塾	長門市中央公民館事業企画運営委員会「わくわく土曜塾」担当	山口県長門市
美祢市子連ジュニアリーダーズクラブ於福支部事業	美祢市子連ジュニアリーダーズクラブ於福支部	山口県美祢市
わくわく科学ＳＵＭＭＥＲフェスティバル2008	岩国科学をたのしむ会	山口県岩国市
踊りをとおし過疎地域の子ども達に夢と機会をあたえる事業	長州とことん総踊り実行委員会	山口県萩市
子ども読書まつり	子ども読書活動推進ネットワーク・防府	山口県防府市
男声合唱を通じての青少年健全育成	山口大学メンネルコールＯＢ会	山口県防府市
合　計　　30件　　800万円		

市民活動支援

1. 募集・応募・選出状況

第26回（2010年度）青少年健全育成市民活動支援を以下により実施しました。

（1）募 集

募集要項記載概要は、以下のとおりです。

（a）対象活動	青少年の健全育成を目的とした、民間の非営利活動 ①自然とのふれあい　②ボランティア育成　③地域連帯 ④エコ　⑤国際交流・協力　⑥科学体験・ものづくり
（b）募集地域	広島県、山口県
（c）支援期間	単年度支援　2010年4月1日～2011年3月31日の１年間
（d）支援金総額	800万円
（e）１件当り支援金額	10万円～50万円
（f）募集期間	2009年10月14日～2010年1月14日

（2）応募状況

締切日までに92件の応募を受理しました。その内訳は、以下のとおりです。

（a）地域別	・広島県	31件（34％）
	・広島市	33件（36％）
	・山口県	28件（30％）
（b）分野別	・自然とのふれあい	12件（13％）
	・ボランティア育成	13件（14％）
	・地域連帯	41件（45％）
	・エコ	7件（ 8％）
	・国際交流・協力	14件（15％）
	・科学体験・ものづくり	5件（ 5％）

（3）支援対象の選出

選考委員会（2010年2月26日・27日開催）での審議の結果、支援候補として、総計31件800万円が選出され、2010年3月24日開催の第80回評議員会および第94回理事会において正式に承認決定されました。

（4）支援金贈呈書の贈呈

・広島県　2010年4月19日、マツダ株式会社本社で贈呈式・交流会を開催。広島県内の21団体に対して、支援金贈呈書を贈りました。

・山口県　2010年4月23日、マツダ株式会社防府工場で贈呈式・交流会を開催。山口県内の10団体に対して、支援金贈呈書を贈りました。

2. 支援件数の推移

本年度を含む３年間の支援件数､内訳は次のとおりです

（応募件数および支援件数）

	本年度（第26回） 2010年度	第25回 2009年度	第24回 2008年度
応募件数（件）	92	97	79
支援件数（件）	31	32	30
支援比率（%）	34	33	38
支援金総額（万円）	800	800	800

（地域別状況）

地域	2010年度		2009年度		2008年度	
	応募件数	支援件数	応募件数	支援件数	応募件数	支援件数
広島県（件）	31	12	35	13	26	10
広島市（件）	33	9	36	12	35	11
山口県（件）	28	10	26	7	18	9
合計（件）	92	31	97	32	79	30

（分野別状況）

地域	2010年度		2009年度		2008年度	
	応募件数	支援件数	応募件数	支援件数	応募件数	支援件数
自然とのふれあい（件）	12	4	20	4	11	1
ボランティア育成（件）	13	6	14	5	14	7
地域連帯（件）	41	12	39	16	35	14
エコ（件）	7	2	4	2	9	4
国際交流・協力（件）	14	5	8	1	6	1
科学体験･ものづくり（件）	5	2	12	4	4	3
合計（件）	92	31	97	32	79	30

役員・評議員名簿　平成23年(2011年)7月1日 現在

財団役職	名　前	役　職
理事長 (代表理事)	山内　孝	マツダ株式会社代表取締役会長兼社長
専務理事 (代表理事)	黒沢幸治	マツダ株式会社常務執行役員
常務理事 (業務執行理事)	魚谷滋己	公益財団法人マツダ財団事務局長
理事	上田宗冏	上田宗箇流家元
	片山義弘	広島大学名誉教授
	川本一之	株式会社中国新聞社代表取締役社長
	櫟本　功	広島大学名誉教授
	山根八洲男	広島大学副学長
	山野正登	有人宇宙システム株式会社相談役
監事	友田民義	公認会計士
	藤本哲也	マツダ株式会社財務本部副本部長
評議員	赤岡　功	県立広島大学長
	浅原利正	広島大学長
	安藤周治	特定非営利活動法人ひろしまNPOセンター代表理事
	宇津木健太郎	公益財団法人中国電力技術研究財団専務理事
	大杉　節	広島大学宇宙科学センター特任教授
	佐藤次郎	財団法人日本語教育振興協会理事長
	竹林　守	マツダ株式会社相談役
	堀　憲次	山口大学工学部長
	山木勝治	マツダ株式会社特別顧問
	山中昭司	広島大学大学院工学研究院特任教授
	山西正道	広島大学名誉教授
	吉田総仁	広島大学大学院工学研究院長
	渡辺一秀	マツダ株式会社相談役

(五十音順・敬称略)

ＮＯＴＥ：
この概要はマツダ財団が2010年度に支援を行った
「青少年を育むための市民活動」31件の活動のひとこまです。

お問合わせは、マツダ財団事務局へ☒
住所：〒730－8670 広島県安芸郡府中町新地3－1 マツダ(株)内
TEL：(082)285－4611
FAX：(082)285－4612
E-mail：mzaidan@mazda.co.jp
ホームページ：http://mzaidan@mazda.co.jp

マツダ財団市民活動支援とは

次代を担うこどもたちが、いろいろなことに興味を持ち、多くの感動を得ることのできる生活体験の機会の提供や地域社会づくりのための諸活動を支援。

対　　象	青少年の健全育成を目的とした、主に民間の非営利活動。☒ 自然とのふれあい、ボランティア育成、地域連帯、エコ、国際交流・協力、科学体験・ものづくりの各場面で、特に、子供たちの参画度の高い活動、創意工夫を育てる活動や、地域でのさまざまな支えあい活動、学校5日制を活用するプログラム、学校と地域が連携する活動を支援。 青少年の範囲は概ね6歳～24歳。
募集期間	毎年10月中旬～翌年１月中旬　活動は翌年4月以降に実施されるもの (4月1日より即実行できるよう、年度開始前に募集し、支援を決定します。)
募集地域	広島県、山口県
支援金額	１件当たり　10万円～50万円